
シュワッчи！ Shuwacchi ! -

坂東秀幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シユワツチ！ Shuwachii！ -

【Zコード】

Z53830

【作者名】

坂東秀幸

【あらすじ】

「命の重さって何グラム?」「どこまでが友達で、どこからが親友?」「夢の価値ついていくら?」そんな疑問を常に抱えていたあの頃…

「一人で武道館ライブ！」無謀な夢を掲げた、ド音痴の少年ジンと、『神の声』を持つ少年ハジメ。

そして、学園始まって以来の秀才児。120キロの肥満児。笑顔を

失い、夢を諦めた少女。運命はそれぞれの物語を引き合わせる…

実話を元に構成された、笑いあり、涙ありの懐かしくも新しい青春小説。

2011/03/17 第16話追加しました。

登場人物 2011 / 03 / 09 更新（前書き）

登場人物は隨時、更新されていきます。

登場人物 2011 / 03 / 09 更新

主人公：早河 隼
ハヤカワ ジン

あだ名：ジン 年齢18歳 厚南高校三年生

性格は、大雑把だがいつもビシッと筋の通った事を言う。しつこくないリーダーシップがみんなから愛される存在。小川一とサンライズを結成。唄は昔は音痴だったが、情熱と気持ちを強く訴えることで何とか唄として「聴ける」ところまできている。

18年間彼女なしで童貞。カバンにイノセントマン人形をぶら下げている。

人物：小川 一
オガワ ハジメ

あだ名：ハジメ 年齢18歳 厚南高校三年生 「神の声」を持つ少年。理由は2つ。ひとつは単に唄がうまいから。もうひとつは、ハジメの唄声には幽霊を引き寄せる力があるから。小柄ながらも、短髪でとても爽やかにさが特徴。

人物：橘 輓
タチバナツグミ

あだ名：タチバナ 年齢18歳 厚南高校三年生 スラ～っと高い身長で、この学校始まって以来の秀才と言われ、人望も厚い。黒縁眼鏡が特徴。

人物：中村 要
ナカムラ カナメ

あだ名：モツサ 年齢18歳 厚南高校三年生 120キロの巨体。

ヒロイン：坂口 美空
サカグチ ミソラ

あだ名：ミソラ

年齢18歳 歌手を夢見る少女。

人物：早河 怜
あだ名：レイ

年齢34歳 ジンの母親でもあり、厚南高校の保健室の先生でもある。タチバナに好意を抱かれている。色気があり、何の香水か分からぬがいい匂いがして、クルクルに巻かれたピンクブラウンの髪が特徴。

人物：松園 健二
あだ名：マスター

年齢45歳 マスターズカフェのオーナー 謎の多い人物。

人物：野田 清道
あだ名：なし

年齢40歳 ジン達の担任教師 人相は、ブルーの2本線のフルジヤージに、オツサンスリッパ&靴下、ウェットオールバック。『地獄棒』と自ら名付けた竹の中に、鉄の棒を埋め込ませたおぞましい武器を好んで持ち歩く。『歩く凶器』と言われ全生徒から恐れられている。

人物：近藤 コンドウ
あだ名：総長

年齢：18歳 トップブラザーという山口県では一番有名な暴走族の総長。身長は高く、右頬に縫い傷があり、獣のような冷酷な目が特徴。

人物：河嶋 カワシマ
あだ名：なし

年齢：16歳 トップブラザーという山口県では一番有名な暴走族の一人。総長の近藤の右腕。トップブラザーの頭脳とも言われている。暴走族でありながら、どこか気品を感じさせる立ち振る舞い。

スキンヘッドが特徴。

人物：橋場ハシバ

あだ名：背の高いおっさん

年齢45歳 マスターがヤクザだった頃の舍弟。今はマスターの力
フェを切り盛りしている。

第01話 ソウガじこがやん（前書き）

夢は武道館ライブード音痴の少年ジンと神の声を持つ少年ハジメ。

そして、夢を諦めた少女、学園始まって以来の秀才児、120キロの肥満児。イタズラな運命はそれぞれの物語を引き合わせる…

作品の舞台が山口県のため、台詞に一部読みづらさ文章が含まれています。“了承ください”。

第01話 ソウガじいちゃん

茜空の下を、黒のランドセルを背負つた三つの影が、ひとつの場所を日掛けて走っていた。

「カシヤカシヤ」と音がするのは、今日の授業だった算数、理科、社会の教科書とノートが中で踊っているからだ。

季節は、秋から冬に変わろうというのに、三人は薄手のシャツと半ズボン姿だった。

市役所の手前にかかる橋沿いにある建物は、8階建てのビルと10階建てのビルに挟まれた場所に凜と建つていた。

38年前に建てられた建物は、全身をコンクリートで覆われ、甲子園を思わせるような植物の蔓が生い茂っている。両サイドには西洋風の出窓があり、一階のちょうど真ん中あたりには、次に台風が来ると飛んで行ってしまうような看板が立て掛けている。

そこには『KING』とだけ書かれてある。

「カラーン、カラーン」と古臭い鈴が鳴り、高学年であるう三人の小学生は建物の中に「カシヤカシヤ」と音をたてながら入つて行つた。

一階は一面フローリングで、観葉植物の溜まり場になつていた。扉を入つて左手にはバーカウンターがあり、世界各国から集めた酒が、所狭しと棚に飾られていた。右手には低いステージがあり、その両側にはアンプと数々の機材が置いてある。

三人はその中央にある螺旋階段を軽快に上り、いくつもの絵画が飾られた廊下を走り、一番奥にある部屋に繋がるドアの前で立ち止

また。

そして、ゆっくりとドアノブを回して部屋の中に入る。

中に入った三人に最初に飛び込んできたのは、入れたての「コーヒー」の匂いと、グラグラと揺れる椅子に座る白髪の老人の後姿だった。

「ソウガじいちゃん。」

三人組の一人で、ハリボテのような髪型の少年が、空氣の読めない大きな声で叫んだ。

その老人は、入れたての「コーヒー」を飲む寸前で止め、カップをテーブルの上に置いた。「コンツ」とカップの音がすると同時に、その老人はしゃべり出す。

「坊主三人が来たつて事は、もう4時過ぎかいな…。」

そう言つと、老人は壁に掛けてある時計を見ながら、三人組がいる扉の近くにある四人掛けの黒のソファーに腰掛けた。

動き出した老人を確認した三人は、その老人より先に向かい側に置いてある黒のソファーに、ランドセルも置かずに座り込んだ。

「じいちゃん、早く昨日の続きを話してえや。」

坊っちゃん刈りの少年は、老人が座つて葉巻に火をつける作業を見て待ちきれずにしゃべりだした。

「まあ、そんなに焦るないや。え~と、昨日はどこまで話したかいの~。」

「じいちゃんの中学校時代までは聞いたよ~。明日は高校生時代か

「いや話すとか言こよつたよ。」

ハリボテ頭の少年が、「しつかりしてよ」と言わんばかりの口調で老人に話した。

老人も、ようやく思い出したのか「お～、そつやったの～。」と言いいながら、葉巻の煙を口に含み吐き出しながらしゃべり始めた…

第02話 三年目の春

市内でも有名な馬鹿男子高校にギリギリで入学した俺は、当然クラス内に留まらず、全校でトップクラスの馬鹿生徒だった。

学ランの第一ボタンは、入学して2週間で2年の先輩にタイムを吹っかけられた時に取れた。喧嘩は好きじゃない。でも、喧嘩を売られて買わない消費者でもない。

もちろん、その先輩はぶちのめした。そのせいで、その日の放課後に体育館の裏に呼ばれ、顔の形が変わるかと思いつくらいボコボコにされた。13対1じゃあ無理もない。

髪がボサボサなのは、セットする暇があるなら寝ていたい年頃だからで、

カバンにぶら下げる人形は、幼稚園から俺のヒーロー『イノセントマン』だ。

話すと、長くなるんで追々話す。上靴は常に足のかかとを折り曲げて履いてるせいか、常に靴下のかかとが汚れていてる。

そして、18年間彼女なしで童貞だ…

俺の朝は、いつも一人だ。それは、8時30分に鳴る始業のチャイムを、学校の校門の前で聞くことが多いからだ。要するに遅刻魔だ。

今朝もチャイムを校門の前で聞き、コンクリートの廊下を歩き、教室の後ろのドアをこそっと開いた。出欠を取る担任教師が出席番号21番の橋本哲也ハシモト テツヤの名を呼び、橋本が「はいっ。」と呟く足元を

4足歩行で通過していると、

「ハヤカワジン
早河陣！」

「はい、先生！今日も天氣いいですね。」

機嫌をとりつとしたが無理だった。

「はい、そのままお前の定位置の廊下に立つとけ！」

その言葉と同時に、担任は持っていた出席簿で俺の頭を叩いた。

「はははははあ。」

「こりでいつも笑いが起きる。」

担任は、この学校で一番怖いと言われている『野田清道』この人は数々の伝説を残した。

身なりは…いや、人相は、ブルーの2本線のフルジャージに、オッサンスリッパ＆靴下、ウェットオールバックとまでいえば顔は自ずと想像できるでしょう。

『地獄棒』と自ら名付けた竹の中に、鉄の棒を埋め込ませたおぞましい武器を好んで持ち歩く。『歩く凶器』と言われ全生徒から恐れられていた。

俺も幾度となく彼の餌食になつた。一番ひどかつたのは、雑巾が所定の場所に掛けられていなかつただけで、その時の風紀委員だった俺が『地獄棒』で3発もケツバットを食らつた。そのときは、ケツがなくなつたと思った。

一時間田の終わり、ようやく開放された俺に近づく2人組がいた。

「これはこれは、遅刻の常習犯の陣君^{ジンクン}じゃないですかあ。」

最初にしゃべりかけてきたのは『タチバナ』だ。彼は、スラ～つと高い身長で、この学校始まって以来の秀才と言われ、人望も厚い。黒縁眼鏡にはこだわりがあるらしく、同じような眼鏡を一週間分持つくらいの徹底振りだ。

「今日の昼飯、何食う?」

呑気にしゃべる田体こと『モツサ』は、120キロの体重以外は特に紹介することも無い。

昼休み、何を食うか迷つて購買部の前を通り、黒い集団が群がつていた。これもいつものことだ。野球部の先輩のパシリで、人気ナンバーワンの焼きそばパンを死に物狂いで買いに来た坊主頭の一年生。目が血走ってる。

無理もない、買い損ねたりしたらどうやられるに決まっている。そんな中、見覚えのある後姿を田にした。

モツサだ…

120キロの巨体を思う存分振り回しているモツサは、まだ入学したてで体のできない一年を、何の遠慮もなくふつ飛ばし、5、6個焼きそばパンを買い占めた。

これが世に言う、人情の欠片もないやつだ。何度かモツサと目が合つた様に思えたが、その血走った目はヒグマか猪にしか見えなかつ

た。

結局、購買部を諦めた俺は、屋上で寝転んで空腹をしのいでいた。春の風の匂いと口差しが心地よくてしばらく一人で沈黙を楽しんだ。

もつ、高校生活最後の春になつてた。

「どうした、若者。」

と、黒縁眼鏡のタチバナが横に座り込んできた。

「何か、おもろいことねえかなー。」

その言葉に対し、「青春ドラマみたいな台詞やの〜。」とタチバナらしい言葉が帰つてきた。空に向けていた目をタチバナに向けて見ると、タチバナも俺のほうを見た。ちょっと見つめ合つてお互に気持ち悪くなつて笑つてしまつた。

「見つめんなーや。」

「オーレ? お前が見つめるけえやううが!」

オーレ? ? ? 何それ…。一瞬気持ち悪いと思つたが、出合つた頃からタチバナは、自分の事を呼ぶのに「オーレ」と言つていた。昔はいつしょにいた友達みんな大爆笑だったが、笑いがひと段落したくらいに間違えて言ったのかわざと言つたのかを確かめると、いつもタチバナは自信満々に「わざとだ。」と言い放つた。

興味なかつたんであまり覚えてないが、タチバナが猛烈にファンだと言つ何とかバンドのボーカルの真似をしたと言つていた事を思い

出したので、今は笑うのを止めた。

「俺等つてさあ、いつから仲良くなつたっけ?」

そんな、何気ない発言にタチバナは眞面目に話しあした…

第03話 黒縁眼鏡と恋と友

幼少の頃から、誰に言われたのでもなく進んで学問の道を選んだ。別に母親が中学校の先生で、父親は外科医をやつているから親を見習つて…とかじやない。人付き合いが面倒臭いだけだった。だつて、数字や文字は絶対であり、裏切らない。

要するに、自分の考えうるもの以外は認めたくない。

そんな、ひねくれ者なオーレに友達なんてできるわけもなく、高校に入つてソイツに出会つ今まで友達なんていらねえなんて開き直つていた。

その開き直りは進路にも出ていた。県内一番の高校を受験すると、両親も担任もクラスメイトでさえ思つていたらしく、オーレが今の馬鹿高校を受けると言つたとき誰もが猛反対だつた。

父親に関しては「そんな高校に進むくらいなら高校なんて行くな!」なんて言つけど、オーレがただ反抗期なだけで、こんな馬鹿学校に入りたいと思うわけがない。

中三の夏、もうほとんどの生徒が志望校を決め、それに向けて勉強をしている頃。オーレは親に決められた名門校に入る事が当然だと思い、その志望校にあえて推薦という選択は選ばず、成績トップ合格を狙つっていた。

理由は簡単、かつこいいから…

その日も、愛用している黒縁眼鏡の金曜日専用（もちろん、一週間分ある。）をかけるなり、参考書を片手に塾へ行くための国道沿いの整備された歩道を歩いていた。

「コンビニを通り過ぎてすぐの信号で止まり青くなるのを待つていた。すると、オーレの肩に「バコッ」と何かが当たった。

こんな田舎の信号待ちでは有り得ない出来事に、油断していたオーレは思わず口口けて「ドンッ」と顔を立ててシリモチをついてしまった。

「きやつ。」

声のトーンで女性だと氣付いた。

その女性は、黒のミュールに黒の網タイツ、グレーのスカートに、白のシャツでかなり色気があった。何の香水か分からぬが嗅いだことのないようないい匂いがした。そのピンクブラウンでくるくるに巻かれた髪は今も忘れない。

よそ見をしてたのはオーレの方なのにその女性は、

「「」めんなさい、怪我してない？」

と、言しながら手を差し出してくれた。

オーレは、さつきまで頭の中で計算してた二等辺三角形の面積と式がふつ飛んでしまった。

やつ... オーレは、この女性に一悶懃れしてしまった...

一番嫌いな恋愛小説でも描かれないくらいベタ過ぎる出会いに動搖を隠せないオーレは、右手を伸ばしたままの「どうかした?」という女性の言葉で我に返る。

彼女は、この先の高校の保健室に勤めているといつ。彼女は急いでいるらしく、何かあつたら高校まで来てとだけ言つとその場を後にした。

その後姿が見えなくなるまでずっと激しく胸打つ鼓動を抑えながら見つめていた。

あの事件があつた後、ずっと彼女のことが頭から離れない。オレはもちろん恋愛はした事がない。小学校の時は国語の教科書の「赤い実はじけた」とかいう物語の内容の意味なんて分からんかったし、理解なんてしようともしなかつたが、今なら何となくわかる気がする。そんな事をひたすら考えたが、理屈じやあ解決できそうもない。

かといって、何て言つて会いに行けばいい?

(すいません、やっぱ、あん時痛めた腰がうずいてきて…)

(やつぱり、あん時に焦がした胸の傷が癒えなくて…)

…不自然すぎる。ああ、こんな感じやあ勉強に手がつかない。

何ケ月もそんなことを考え抜いた結果、ある結論にたどり着いた。そうだ、彼女が勤める学校に入学すればいい、そうすれば頭が痛いですとか適当な理由をつけて保健室に行けばいいんだから。

そうなると、次にやらないといけないのは…両親と担任の説得かあ。

あの馬鹿高校に入るなんて目を閉じてでも合格はできるが、間違いなく反対される。特に、父親に関しては無理に近い。今まで私立の名門校に通わせてもらっているオーレを、将来は間違いなく医者にさせようとしてるだろうから。

少し罪悪感に襲われた。

そんな両親を押し切つてこんな馬鹿高校に入学した事は、今となつては後悔はしてない。異常なほどに意志の固いオーレを見るのは初めてらしく、父親は「勝手にしる」と捨て台詞を残したまま、ほとんどの口をきいてない。

母親は「あなたが自分で選んだんなら私は応援するよ」と相変わらずオーレの気持ちを分かつてくれた。

入学しても相変わらず友達なんてできるわけもなく、どんな理由で保健室に行けばいいのかもわからず、クラスでも浮いていたオーレは、毎日授業を除いて休み時間や放課後は体育館の裏で小説を読むことに時間を費やした。

やはり、県内でもっとも馬鹿な学校なだけあって生徒も馬鹿そつな奴で溢れかえっている。

その日もぐだらない授業も終わり、いつものように生徒たちが下校する時間帯をさけるために体育館裏へ向かっていた。

別に一緒に帰る奴もないし、群れるのが大嫌いだったオーレは、生徒たちが下校した時間を見計らって帰るようにしていた。ジャリ道を抜けて、体育館の裏まで行き、壁にもたれながらの読書がいつもの日課だ。

しかし、その壁側に寝そべってる奴を見つけた。あそこはオーレの特等席だ。ちょっとイラッときたが、どうもそいつの様子がおかしいので近づいてみると、そいつは顔のいたるところから血が出ていて、目は妖怪みたいに膨れ上がっていた。おそらく集団に暴行されたのだろう。そいつは、人の気配に気付いたのか妖怪のような目を開くなり、

「そんなに、見つめんなつひの。」

と、口の中の血を吐き出しながらしゃべりだした。そして、変な沈黙が続いた。

「ぶつーがつはつはつはー！」

思わず吹いてしまい、一人で笑い転げてしまつた。あんなに笑つたのは生まれて初めてで、腹がねじれるとはこのことを言つんだと知つた。

よく分からぬが、ソイツと意氣投合してしまつていろいろ話した。ほんと、くだらなくて、低レベルな会話だつた。でも、今まで接してきた奴と全然違うタイプの人間で、ソイツのくだらなくてクソおもしろい話を不思議と聞き入つてしまつ自分がいた。

名前を「ハヤカワ早河陣ゼン」ハイツと名乗つた早河陣をとにかく治療しなければと思ひ、肩を持ち上げて彼女の待つ保健室へと連れて行つた。

この学校に入学して2週間、こんな形で彼女に会えるなんて思つてもみなかつた。1階の校舎のコンクリートの廊下通り、標識に「保健室」と書いてある門の前に立つたとたん、急に足がすくんでしまつた。

…何度も、この扉を開けようとして止めたことか。

「ついで、あつさり開けちゃうんだ。」

と、思つてゐる事がつこ声に出でてしまつたオーレに、何のためらい

もなく早河陣は「当たり前やん。」と言しながら「ガラガラ」と扉を開けて中に入ってしまった。

オーレも、破裂して内臓が飛び出るなどやないかと思いつら一ドキしている胸を押さえながら、その禁断の部屋へ一步また一步と足を踏み入れた。

はじめに飛び込んできたのは忘れもしない、あの時の香水の匂いだ。そして、ココが男子校だと言つことを忘れてしまつくらいに純白に統一された部屋はまさに絵に描いたような保健室つて感じで…つて、保健室か…。

とにかく、初めて入ると「おかえり」とて感じだ。

「おひ、怜一ちゃん」と治療してやー。」

ん?呼び捨て???

「あんた、また喧嘩しちゃったん?しかも、ボーボーやー!」
ん?親しいの???

「うせー!」

ん?暴言?

幾つかおかしい点もあるがまあいい、ひとまず彼女と再会できた。今日も白のシャツに黒のスカートで、おまけに羽織つていいる白衣がまたよく似合つ。

「あ、あなたは…」

おー・オーレによつやく気が付いた。オーレは、自分の頭の先からつま先まで電流が走る音を聞いた。

「ん~…」

無理もないよな、あの衝撃的な出会いにはもう半年以上も前だし、たかが数分の出来事だし。でも、彼女は脳裏に何かが過ぎた様な顔を浮かべながらしゃべりだした。

「「」の生徒やろ?？」

「いや、見りやわかるでしょー。」

早川陣^{ソイツ}は、「痛いつ、痛い!」と叫びながら彼女から治療をしてもらっていた。

「だらしねえな~、そんな子に育てた覚えはないよー。」

は?…「そんな子?」「冗談つまないな…。」

でも、普通冗談を言うときはもつと笑つて言うやろ?まさかね…。まさか、こんな美人がこんな下品な猿人を生む訳がない。

「そんな子つて、先生!面白い冗談ですね。ははは。」

と、彼女の冗談を引き立たせるために入れたフォローに下品な猿人^{ハヤカ}が食いついた。

「あ、言ひの忘れちよつたけど、「」つー応さあ俺の母親ね。」

「七? ?」

「一応とは何よー馬鹿息子ーー！」

「え、ええええええええええええええええ—！—！—！」

真っ白になつた・・・。

「そんなに驚かんでも…。」

早河陣は、オーレにそんな事を言つた気がするがよく聞いてない。

「え、でも先生の年齢を予想すると、陣君の年齢と合わないような気がするんですけど。」

「ああ、あたしは陣を16で産んだからねー。」いつ見えてもつ、34

「は、はあ…」

オーレはやう返すのでやつとだつた。

その帰り、早河陣と別れて消防署の裏のあぜ道を一人で歩いている
ソイツ
と、何か笑ってきた。

何してんだろう？

親の反対を押し切つてまで入った高校の保健室に勤務する初めて恋した人が、初めて友達になれそうかなあと思えるやつの母親なんて。一気に肩の力が抜けてしまい「ドンッ」とまたシリモチをつい

てしまった。

「一生の友達になれそうだな」陣。^{ジン}」

「ほれた涙は、甘酸っぱい初恋の味とドロドロの友情の味がした」とでも言つておひつ。

第04話 空腹の喫茶店

空腹のまま授業も終わり、モツサとタチバナと俺は消防署の裏のあぜ道を抜けて、住宅街の中にある、「マスターズカフェ」と看板の立つた店へ足を運んだ。

「カラーン、カラーン」と店内に鈴の音がこだますると、奥の方からスキンヘッドでサングラス、袖から龍の入れ墨が見え隠れするTシャツを着たガッシュリとした中年男が出てきた。

一応、白いエプロンをしているので初めて来る客でも店員だとわかるだろう。

店内は一面フローリングで、観葉植物がうつとうしくない程度に飾られていた。そんなに広くないが何故かここに来ると癒される。

中年男は、俺たちだと分かつた瞬間に肩の力を抜いてしゃべりだした。

「お帰りなさいませ」主人様ってか。」

「今のところ、マスターは世界一その台詞が似合わんね。」

マスターの発言に冷静にタチバナが答えた。

「うつせえ、未成年。」と、毒を吐きながらいつものでいいのかと聞いてきたので、代表して俺が「うん。」とだけ言つと一番奥の窓際の席に腰掛けた。

そして、タチバナはカバンから厚い本を取り出して、お決まりの読書を始めた。

マスターとは俺が小さい頃からの仲で、父親を知らない俺にとっては血の繋がらない父親みたいな存在だった。よく怜と喧嘩して家出した時とかは家に泊めてくれていた。

怜とマスターの奥さんは小学校時代からの親友だった。でも、どう言つて6年前にマスターは奥さんと離婚して今は一人で店をやっている。怜もそれ以来、気まずいらしく店には顔を出さない。

マスターは、オレンジジュースの入った業務用の紙パックを3つのコップに注ぎ、顔に似合わず手作りしているショートケーキ1個と、ジュースをおぼんに乗せ、俺たちのいる窓際のいつもの席にヤンキー歩きで来た。

「ああ、腹減つたー！俺朝から何も食つてないんよ～。」

荒々しくテーブルの上にジュースの入ったコップを置くマスターは、わざとらしくしゃべる俺に反応して答えた。

「出世払いのくせに文句言つなかつー！」

「うせえ、俺が大物になつたら…」

「店」と彌つちやるーやう??ー億万回聞いたわー！」

俺の名台詞までスキンヘッドに取られた。

悔しがる俺をよそ目に、満面の笑みでモッサは田の前のショートケーキを完食するのに精一杯だった。

「ああ、相変わらずモッサは田をつい食べのー！」

財布の中身と相談の結果、よだれを垂らしながらテーブルに顎をのせて、モッサを見てそつ発言するしかなかつた。

「そつこえばわあ、モッサー・ジフなん、『ンハド』の女の子…声かけてみた?..」

ケーキを食べるのを中断したモッサは、顔を一度見てすぐ恥ずかしそうに手をやさし、小さく「いいや、まだ。」と呟つた。

「おー、何年片思いしちゃるんかー。」

「毎日来て、立ち読みするだけのお密やけえ嫌がられちよのやうつねー。」

聖書並みの分厚い本を読んでいたはずのタチバナが、急に会話に入ってきた、読書に戻つた。

「話、聞こいやつたんや…。確かにタチバナの話つことは正しいな

…」

「そつこえば、応援するあるん?」

不安そつにモッサが口にやる。

「あー、あーひちやー応援するついたのも俺からやー…」

とは言つたものの、モッサの性格からするとジロジロやの子を見てるから、なおさら気持ち悪がられてるはず…。

そんなことを考えだと、余計に不安になつてくる。

「当たつて碎けろじゃねえか?」

グラスを磨いていたマスターがしゃべりだした。

「おお！マスターいい所に入ってきた！」

と、俺が囁し立てる。

「今となつちやあ失敗談になつちまうけど、前の奥さんに告白するときなんて彼女の働いてる職場に2年間も通いつめてバシッと言つてやつたぞ！！」

「齧迫やん！ んで、どうやったん？」

二
俺。

「 フラられた。」

「駄目じやん！！！」

と、モツサ。

「でも、23回戻してやが出来たっしゃーー。」

「やります、脅迫せん！」

マスターの意見は当てにならなかつたので却下。ため息をつくモツサを励まそうと恋愛経験のない俺は必死に考えるがやつぱり出なかつた。

「ちょっと原始的やけど、ラブレターはじつかあ？」

「さうすがタチバナ！それで行こう。」

と、タチバナの氣の利いた発言に救われた俺は声を高らかにしゃべった。

手紙は、試行錯誤しながらも一時間ほどで書き上げた。3年も思いを募らせばそんなもんなんだろうか…。

「できたやん！早速、渡しに行こう。」

と、俺。

「でも、彼女、仕事終わるの9時やもん…。」

と、モツサ。

「あと、3時間はあるな…。」

腕時計を見ながらマスターが言つ。

「ああ、駄目だよモツサ君。マスター・ズカフュは閉店が8時までなの…。」

と、俺。

「嫌味にしか聞こえんな。しゃーないな。9時まで営業延長。」

「ああ、ありがとうございますー・マスターー！ー！」

モツサは、男氣のあるその発言に大喜びでマスターに近づき、手を握り締めた。言つまでもなく、マスターは嫌そうだ。

時間を潰すのが大の苦手な俺は、空腹に襲われながらいろいろくだらない話をした。

それに乗つかつて、難問ブックを読んでいたタチバナが、おもむろにしゃべりだす。

「そう言えば、モツサって何でモツサなん？名前は「中村 要」や
る？」一文字もかぶつてないやん……。

言われてみればそうだ。

モツサは口数が少ないせいかあまり自分の事を話したがらない。

タチバナと俺は、興味津々な瞳でモツサを見ていると、さつきまで放置していたショートケーキを食べ終えて、フォークを皿の上に置きながら重たい口を開いた。

第04話 空腹の喫茶店（後書き）

第05話 醜い鶏の子

一般的な家庭で生まれ、みんなと同じ空気を吸い、みんなと同じように生きてきたつもりだった。

しかし小学6年で85キロにまで膨れ上がり、中学に入つてからは100キロ田前なワイの体系や内気な性格を見て、面白半分にクラスマイトの連中はイジメを繰り返した。

最初の方はまだ「おデブ」「カロリー」とか言われるだけだったから、ワイはただ笑つてやり過ごしていた。

でも、無反応のワイを見てイライラしたのかイジメはだんだんエスカレートして暴力や嫌がらせになつてきた。その頃から、見た目がもつさりとしているからと書いて、リーダー格の近藤が「モサー」と呼び始めた。

一番ひどい嫌がらせは、授業中にとなりの女子が筆箱を落としたので拾つてあげると

「いや～！もう、この筆箱使えんわ～ねえ！」

と、泣き出してしまつたとかな。

あの時は、家に帰つてから目が腫れるくらい泣いた。

そんな生活でもワイは、なんとか耐える事ができた。

それは、友という名の大きな救いのお陰だった。

ワイに比べたら貧弱な体だが、とても心の優しいのぼる君はいつもそばにいてくれた。どんなにワイが陰険なイジメに合おうと、のぼる君だけは、一人ぼっちのワイと給食と食べてくれば、「いつしょ

に帰る「ひり」と言つてくれる。

休みの日は、図書館に行つた。のぼる君は頭がいいので難しそうな本を探しては読んでた。ワイに、そんな難しい本は読めるわけもなく、雑誌や絵本を読んで時間を潰した。そんな休日の過ごし方も楽しかった。

でも、恐れていた田は突然やつてきた。

朝^じはんを食べ過ぎたワイは、ちよつと膨れ上がつたお腹をさすりながら何ら変わりない通学路を歩き、登校した。

そして、あんまり田立たないよつに席に着いて辺りを見回すと異変に気付いた。

いつもなら、席に着くなり近藤たち^{コンドウ}がやつてきて、ホームルームが始まるまでイジられて一日が始まる。近藤たちだけじゃない。よく考えたら、他のクラスメイト達と一緒にすり合つていはない気がする。

それは、一時間目、二時間目が終わる^{いざ}とに皮肉にも信憑性がわいてきた。

そんな状況なのに、心のどこかでは冷静でいられた。

それは、のぼる君が昼休みになつたら、「いっしょに^{いっしょ}に飯食べよつ」と言つてくれると信じていたから。

しかし、ワイは初めて給食を一人で食べた…。

初めて孤独と言つものを見つた。

のぼる君は結局最後までワイを避けて一日を過ごした。みんなに無

視されるのはまだいい、辛いのはのぼる君に無視されたことだつた。

その日は、一人で帰つた。

家に帰るなり、そのまま一階にある自分の部屋に入った。ベッドの中にしづくまり、何時間か声を殺して泣いた。途中で、母さんが、

「要^{カナメ}へ、ご飯よ～！」

と、ドアを叩いたが起き上がる状態じゃなかつた。

きっと、のぼる君は何か嫌な事があつて、今日は誰とも話したくなかつたんだと言い聞かせる事しかなかつた。それでしか、現実の世界に自分を存在させる方法はなかつた。明日になればみんな今まで通りになつてるはず…。

次の日も、次の日もワイは一人ぼっちだつた。のぼる君は休み時間や帰りは、近藤たちと一緒にいた。のぼる君に声をかける勇気もなく、ただ「今の状況に慣れよう」と自分に言い聞かせながら、孤独な日々を過ごした。

何も抵抗しないワイに対し、近藤たちはむきになり、クラス全員を巻き込んだ仕打ちは、卒業日前であるひつと関係なかつた。

前日の雪が残るいつもの帰り道を、ワイは今日も一人で帰つていた。

もう、誰からも相手されない事は心のどこかで慣れてしまつっていた。

そんなワイの田の前に、懐かしい後姿が飛び込んできた。

のぼる君だ…

のぼる君はワイと田を合わせるなり、その場を駆け足で逃げ去つ
とした。

「のぼる君ーー！」

自分でもこんなに大きな声が出たことに驚いた。その声をきくなり、
のぼる君はビタッと立ち止まつた。

「何でなん？」

その言葉にすべてを込めた。

別に、仕返しをしたいとか、謝つてほしいとかではない。ただ、何
であんなに優しかったのぼる君がこんな酷いことをしたのかを知り
たかつただけだった。

でも、「近藤たちに脅されて仕方なくした」って心のどこかで言つ
てほしかつた。

「要君を無視せんと、次は僕が標的にされるけえ…。もひ、僕に話
しかけんで！こんなところ近藤君たちに見られたら仲間と思われる
…。」

そう言い残して、のぼる君は走り去つていった。

こんな話を聞いた事がある。

鶏には弱い者いじめの習性があり、複数を小屋に閉じ込めるリーダー的な鶏が出てくる。ソイツが、一羽をつつくななど攻撃すると、群れ全体がそれを真似する。

例え、いじめられた一羽が死んでしまっても、次の一羽を見つけて攻撃する。そんな負の連鎖は永遠と続くといつ。

どこか人間に似ている。

何てことはない、ただ今回がワイの番だつただけの話だ…

のぼる君の後ろ姿が見えなくなるのと同時に、心のどこかで救いを求めていたワイの希望は、全て打ち砕かれた…

そして、生きていく自信を失った…

ワイは、卒業式には出席せず、何とか受かつた高校の入学式も欠席した。

ただ、何をするのでもなく、一日また一日と、無駄に過ぎて行つた。高校に入つて2週間が過ぎた頃、ワイはまだ生きていた…。正確には、死ぬ度胸すらなかつた。

日が沈むのを見計らつて、何を思ったか外に出ていた。

久しぶりに見る町はどこか心地よかつた。

ワイは、いつの間にか人と接するのが怖くなつていた。

人目を避けるように駅の近くを歩いていると、どこのからか罵声が聞こえてきた。

初めは、酔っ払いが叫んでいるんだろうと思つていたが、酔っぱらうにはまだ早い時間だ。あまりにもおかしな声の主に、どつしても一目会つてみたくなつた。

駅前まで行くと、声の主はストリートミュージシャンだという事がわかつた。ただ、ギターを持っていなかつたらただ叫んでいるだけの残念な奴にしか見えない。

これが世に言ひ「音痴」なんだと知つた…

近づいてよく見てみると、その音痴は顔のいたるところに絆創膏や包帯だらけで、目は妖怪みたいに膨れ上がつていた。おそらく集団に暴行されたのだろう。

……。

「ぶつーがつはつはつはー！」

押さえきれず体の奥底から、笑いが噴き出してきた。^{パンツ}音痴には悪いが、この光景はどんなバラエティ番組やマンガよりも面白かった。^{パンツ} どうしたらこんなに下手に歌えるのだろう？
どこから声が出ているのだろう？
自分の耳にはどう聞こえているのだろう？
何人に殴られたらこうなるのだろう？

そんな事を考えれば考えるほどおかしくて仕方なかつた。

あまりにも笑いすぎたもんだからさすがに音痴オノヌシは怒りだし、ワイの顔を何発か殴り出した。

「痛いっ。」

「当たり前やろ。」それが頭をなでよるより見えるか？」

確かに見えない…

でも、人から殴られるのっていつぶりだらう…

ワイは、この時に生きているって感じた瞬間はない。

馬乗りになつて音痴オノヌシはワイを殴り続けた。せつしていると、どこからか同じ年くらいの男子が駆け寄ってきた。

「陣ー何しよんか！やめろー！」

男子は音痴オノヌシの脇を持ち上げて止めてくれた。音痴オノヌシは興奮で我を失っていたのだろう。

後から来た男子は、何とか音痴をなだめると、ワイの方に近寄ってきた。小柄ながらも、短髪でとても爽やかに見えた。どうやら、ワイに謝罪の言葉を述べに来たのだろう。

「陣の眼を馬鹿にしてええのは、僕だけじゃー。」

バコッ！

「えー？」

恐らく、爽やか男子の右ストレートがワイの顔面を直撃して、氣絶したんだろう…

次に目が覚めたのは、駅前のバス停にあるベンチの上だった。目の前には、爽やか男子。

「すまんやつたなあ。つい血が上ったんよ。ハハッ。」

なんて陽気な人だろ^う。

落ち着いたワイたちは、それぞれの事情を話した。

爽やか男子は、「小川一^{オガワ ハジメ}」と言つらしい。

そして、音痴は「早河陣^{ハヤカワ ジン}」と言つた。

二人は、「サンライズ」というデュオを組んで、毎週金曜日にストリートライブをしているそうだ。一人は、ワイにはない魅力を感じる。

「中村要^{ナカムラガナメ}つて言うんやね～。変な名前。」

「陣^{ジン}！ 初対面から失礼やろ！ でも、珍しい名前やね～！ 僕はてっきりゴンゾウつて言うんかと思つた！」

「お前の方が失礼やろー。」

この二人は息ぴったりだ。

「あだ名は？ みんなから何て呼ばれるん？」

「わいは、陣ちゃんの質問を聞いた時に、嫌な思い出が一瞬で蘇った。

おーテーブ、カロリー、モサー、ドメスティックテーブ、センチメンタル脂肪…

どれも嫌なあだ名ばっかりだ。」のどれを教えてもまたイジメられる。

びひじょひ…

「びひしたん？ ほひのはずかしいん？ 僕なんか、昔マックに書いた時こそ。ケチャップが服に付いただけで「チャップ男^オ」って2週間は呼ばれよつたよ…」

「ははは、だせえ。でも、僕なんか昼休みから帰つて来た時、机の上にトウモロコシの粒があつただけで、2カ月間ぐらご「ローン」つて呼ばれよつたよ…」

「ははははは…」

なんだか、このふたりの前じゃワイの歯みなんて米粒に見えてきた。ワイは勇気を振り絞つて言つた。

「も、も、モッサッ…」

あ、やばい。モサーって言おうとしたら歯んでしまつた…

「おお、おもろこやん…んじゅ、今日から俺らの友達な…モッサ…」

「おお、おもろこやん…んじゅ、今日から俺らの友達な…モッサ…」

友達…。

「こんなワイに友達になってくれるの？」
ワイは嬉しくて、嬉しくて涙が出しそうだった。これから進む未来
が晴れた気がした。

今日から、頑張ろうと心に決めて、新しい友達と楽しい人生をお・・

「あ、ところでモッサ。何でさつき噛んだん？」

あ、後から言つてくるパターンなんですね…

第06話 神の声

「あ…、これって御子柴さんの仕業じゃねえ？」

タチバナが嘘をつく時はすぐわかる。しゃべった後に必ずベロを少し出すからだ。

よつて、御子柴さんなんて人は、俺らの知り合いには存在しない。疑わしい事や、事件が起ると必ず登場する「御子柴さん」。責任転換と言つてしまえばそれまでだが、仲間を疑わないと云つ意味もある。

俺らの作り上げた御子柴さんは、とにかく凶悪人物だ。数々の窃盗や喧嘩、器物破損を繰り返し、ブタ箱入りは数知れず。複雑な家庭環境で育つたため、グレたらしい。

…あくまでも想像だが。

それに仲間内では、補導された時は必ず御子柴と名乗るので、地元警察の中でも要注意人物になつてゐるらしい。

今回、なぜタチバナが御子柴さんの名を使つたのかと云つと、さつきあまりにもの空腹に耐えかねた俺が、出世払いで頼んだオムライスを、俺がトイレに行つてゐる間に何者かに食べられたからだ…。誰だ…。もしかして本当に御子柴さん？

「つんな訳ねえやん！食べ物の恨みは恐ろしいぞ。子羊どもつ！」

よく見ると、タチバナとわざわざラブレターを渡してその場でフフ

れたモツサ以外

に、こいつスマイルでこいつを見た奴がいた。

一^{ハジメ}だ。

確か「コイツは体調不良で学校休んでいたはず。」

とつあえず、3人に制裁を加えて席に座った。

「学校休んだくせに、出でくんやー。」

「いいやん、家にある暇やもん。タダ飯も食えたし。」

一^{ハジメ}とは小学校からの付き合いで、同じ高校にも通っていた。昔から体は

弱いくせに強がるとこひが生意氣だ。

それに眼が尋常じやなくうまい。

つい最近、一緒に出場したコンテストで、審査員^{ハジメ}に「神業」とベタ褒めされていた。

まあ、結果は審査員特別賞で、一^{ハジメ}がいなかつたら当然とれてない。

俺ときたら、眼うつ場所^{ハジメ}にて「音痴」と罵られる。

(これでも死ぬほど練習しどるんじや。)

俺はこんな経験から、どんなパフォーマンスを自分の田の前でやっている奴がいて、馬鹿にはしない。

ソイツらが、どんな血のにじむ努力をしたか知らないからだ。

もちろん、罵られたヤツは素直に受け止めないといけない。でないと、成長はない。

早く一との距離を埋めないと。

俺は、寝る間も惜しんで頑い続けた。やつらば、どつかのプロ野球選手が言っていた。

「1%の努力と99%の才能でプロ野球に入りました。」

ん？あ、間違えた。

逆だ。

これじゃ、才能ないヤツは諦めろって言つてんようなもんだ。
まあ、自分の話はこれくらいにしておく。

一の唄声が「神の声」と言われる理由は「唄がつま」の他にも一つある。

一が唄えば、生きてない者まで集めてしまう。要するに、一の唄声には幽靈を引き寄せる力がある。

最初は俺だって信じちゃいなかつた。でも、一と弾を語りすむようになつてから、ヤツの発言や行動を耳の当たりにするといつてやるを得なかつた。

そのお陰で、靈感なんてまったくなかつた俺が、気配や声なんか見えた
り聞いたりすることができるようにまでなつてしまつた。

この日も、金曜日だつたので皆と別れた後、路上ライブを決行した。
夜も遅い事もあつて、お客様も2、3人ほどだつた事もあり、1
時間ほどで切り上げた。

すると一^{ハジメ}が、

「今日は、沢山見に来てくれたね～！」

と、微笑みながら言うもんだから余計に氣味が悪い。

「いや、2・3人くらいしか来てないよ！」

「マジ?なら、また見間違えちつた。ハハツ。」

一^{ハジメ}はたまに生きている人と死んでいる人の区別がつかなくなる時
があつた。

夜も更け、野良犬の遠吠えがどこからか聞こえてきた。田舎特有の
この静まり返つた夜。俺は好きだ。

ギターケースにギターを入れおわると、ふいに一^{ハジメ}がまじめな顔して
こつちを向いた。

「陣。」

「ん?」

「いつか一人で、武道館でやりたくねえ?」

「 もうやめ。サンライズで絶対やろうぜえ～。」

忘れもしない…

一^{ハジメ}が「武道館でやりたい。」と言ったのは、後にも先にもこの時^{ハジメ}が最後だつた。

この日は、コンビニでカツ丼を買つて、駐車場で一人で食つた。

他愛もない将来の夢の話をした。

でも、その会話に出てくる将来の自分は、穢れを知らない、まつすぐな少年達の心からなりたい自分の姿だつた。

だけど、その時の俺たちには、これから起こる大事件の事も、その引き金が一^{ハジメ}の能力であるという事も、まだ知る由もなかつた。

第07話 Blue Candy

今日も昨日と変わらず朝日が昇った。

別に昇らなくていいのに…

朝日が眩しそぎて田眩がしそう。

私はおもむろに写真たてに飾られている写真に目をやつた。そこには、嬉しそうにマイクを持つて、フリフリの服を着て唄う幼い私の姿があった。

歌手になる事が夢だった。

有名になつて、パパとママに私を捨てた事を後悔させたかった。

うそ…

ホントは私はここにいるつて見せてあげたかった。

今の事務所に入ったのは私が14歳の時。施設の園長先生が応募してくれたオーデ

イションに受かり、地方の電力会社のCMに出してもらったのがきっかけだった。

この世界で生きていくと決めていた私は、恋もせず、高校にも行かなかつた。自分でもびっくりするくらい必死になつて働いた。

でも、現実はそんなに甘くはなかつた。

ストリップバーや、デパートの屋上でヒーローショウのついでに唄つた…。プロ

デューサーに唄いたければ来いと、ホテルに連れていかれた事もあつた。あの日

の事は思い出したくもない。

どれも、「売れるためにした事。」「唄うためにした事。」と自分に言い聞かせて生きてきた。

周りで信じられる人なんていないから、唄だけを信じて夢に生きてきた。

あの日までは…

その日は、以前から気になっていた喉のしこりの検査のために病院に来ていた。

「坂口さん、サカグチ 坂口美空さん、どうぞ。」
ミンカラ

そう言って、看護師さんが部屋へ案内してくれた。
中には険しい顔をしたお医者さん。

重々しい空氣の中、何だかいろいろ話してきたけど、頭の悪い私に理解出来たのは2つ。

ひとつは甲状腺がんのこと。

もうひとつは、手術をすれば腫瘍は取り除けるが、水を飲んだ時むせたり、声がかすんだりする。最悪の場合、声が出なくなる可能性

があると言ひ事。

どちらにせよ、今のよつには唄えないって事…

1000人に1人はなる病氣で死にいたる事はほとんどないと
が、私から唄を奪う
なら人生を失つたのと同じ事。

まだ18で、これからつて時なのに…

手術は成功して、声が出なくなるという最悪の結末は免れた。でも、
声がかすれ
、前のよつには唄えない体になつてしまつた。

もちろん、仕事もなくなり。事務所からは、「アイドル路線で行く
か、ヌードかな?。」

なんて、皮肉を言われてる。

そして、今日の朝つてわけ。

こんな絶望の淵に立つてゐてのに、お腹は言つこと聞いてくれない。さすがに
2日何も口にしなかつたら当然があ。

しかたなく、駅前にある「セントラル」と言ひいつも行くスーパー
に足を運んだ。
牛乳とロールケーキをかごに入れ、レジに持つていぐ。
すると、やっぱりあの人人がいた。

髪はボサボサで、店員とは思えないほどの無愛想な態度。毎週土曜
日の午前中には必ずいる。

初めは、「嫌な人」としか思わなかつた。

でも、何度も見かけると、不思議と興味がわいてきた。

まず、身なりからして私とタメくらい。近くの高校生つてどこかな。右手でレジ打ちしながら、左手でゴルフボールを2つ持つて、手のひらで転がしている。一番、意味がわからんのは、私が買ったものと一緒に必ずあめ玉をくれる。しかも、いつも青色。

なぜ？？

気持ち悪いから一度も口にした事はない。

今日もお決まりの様に青色のあめ玉をかゞの中に入れるもんだから、つい。

「あの…。これ何のつもりですか？」

思つている事が声に出てしまつた。すると彼は、

「店の商品じゃないから、心配せんでもえよ。」

「いや、やう言つ意味じゃなくて、何でいつもくれるんですか？」

すると、彼は左手の動作を止めた。

「悲しそうな顔をしちゃう女の子には優しくしりつて、じこりちゃんが言いよつたけえ。」

堂々と的はずれな発言をする彼にムカッときた私は、

「迷惑なんで、もうやめて下さい。」

それにはさすがに彼も驚いたらしく「『めん』と一礼しながら素直に言つた。その素直さに、怒りもどつかに行つてしまつた。

私がムカついたのは、あめ玉をかこに入れられる事じゃない。見ず知らずの人に「悲しそうな顔」だという事を見透かされたから。私は、胸の内を誰にだつて見せなかつた。見られるのが怖くてわからないように平然を装つてきた。

なのに、彼はだいぶ前から私の胸の内を知つていたつて事なの？

そんなことを考へていると恥ずかしさが込み上げて来て、逃げるように出でいつてしまつた。

何百メートルか走ると息が苦しくなつて、その場で咳込んでしまつた。

私の体はだいぶ弱つてた。

すると、後ろに人影があるのに気付いた。

彼だ…

私の後を追つかけてきたみたい。

「な、何つ？なんか用？」

「いや、牛乳とロールケーキ忘れちよつたけ。」

彼は、わざわざ私が忘れたのを届けてくれた。

その瞬間、胸を誰かにつねられた気がした。あまりの突然の事に、

両手で胸を押

さえるのがやっとだった。

「なら、俺バイト中やけえ戻るわー！」

。

「ね、ねえ。」

一度背を向けた彼は、私の言葉で振り返った。

「あ、ありがとう。」

「おおー…ええよ、ええよ。」

「なんで青色なん?」

「え?」

「あめ玉の色、なんで青色なん?」

「ああ、俺のラッキーカラー。俺の好きな『イノセントマン』のメイン色でもあるけど…。」

「あ、そう。よくわからんけど…。私、美空。あなたは?」

「俺は早河陣^{ハヤカワジン}。」

その後、何回か言葉をかわしたけど覚えてない。

全然タイプじゃないはずなのに、何か変な気持ちになった。

その日以来、「セント」に行くときはメイクをして少し大人っぽい服を来ていくようになりました。

私のお気に入りのアイテムの中に懐中時計がある。コレを首から下げてアクセサリーにしている。見た目はもちろん気に入っているけど、一番の目的は夢を忘れないため。

この懐中時計の針は、私の大好きな「ボラボラ島」の時刻に合わせてある。いつか、あの島に行つてみたい。コレを見るたびに夢を思い出させてくれるので。

でも、病気の事とか、仕事の事でいっぱいになつていて、いつの間にかただのアクセサリーになつっていたのに、陣君ジンと話をするようになつてから、不思議とその夢を思い出せせるようになった。

今日は、土曜じゃないけど、近くの公園でいろんな話をした。

私と同じ「歌手になる」と言つ夢がある」と。
相方の一君のこと。

特に、イノセントマンの話は面白かった。

「小さい頃テレビでやりよつたヒーローものの番組である。ヒーローになりたいダメ男が、元祖イノセントマンに『次のイノセントマンは君だ。』つづって、勝手に交代させられる所から物語が始まるんよ。」

陣君の言葉は、ひとつひとつが前向きで、聞いている私まで元気にしてくれた。

でも、素直じゃない私は、そんな陣君ジンといつも笑顔になれないなかつた。

思えば、私は幼いころから「笑わない子供」だった。施設で育つて、少ないながら唄の仕事をして、病気になって、唄えなくなつて…いつだつて、一人だつた。だから、誰にも期待しないし頼りにしない。そう決めて生きてきた。

周りの大人们は、自分の利益のために私にやさしくしてただけだつた。

だから、こんなにやさしくされるのは初めてだつた。

完全に信用したわけじゃないけど、陣君ジンとならいつか心から笑えそうな気がする。

そう思えたから、はじめて彼にもうつた「青い袋に入つたあめ玉」を口にしてみることにした。

第08話 ただ、一秒でも永く…

季節は、どうやら梅雨明けをして夏を迎えたようだ。ただでさえ暑いのに、オーレの大嫌いな蝉の鳴き声のせいで暑さに拍車がかかる。

そんな事はさて置き、コンクリートで有名な我が町に大事件が起っこりつつある。

それを阻止するべく、立ち上がったのは我々「厚南倫理委員会」。
そして、会長であるオーレは、緊急会議を開くべくマスターズカフェに仲間を集結させた。

「これより、『早川陣^{ハヤカワジン}』最近、様子がおかしなじやねえ?・会議^{タチバナミ}を開催します。私は議長を務めます、厚南倫理委員会会長・橘鶴です。よろしく。」

「パチパチパチッ。」

「タチバナつて、下の名前シグミつて言ひんや～！ははっ。」

「マスターは黙つてて下さい。」

「かしこまりました」主人様つてか。」

いつもこの人が空氣を台無しにする。

「それでは、まずは西さんからの捜査報告をお願いします。」

「はい、議長！」

まず、最初に手を挙げたのは一^{ハジメ}だ。

「最近の陣^{ジン}は、路上ライブが終わるなり、そそくさと帰る傾向^{ジンテイ}が見受けられます。以前は、牛丼を食べに行き、今日のラーメンをしていました。おかしさ満載です。」

「はい、ワイも最近の陣^{ジン}ちゃんの様子はおかしいと思^シいます。なんか、ボ^クっとしてる事が多い気がします。」

モツサは、拳手もせずにしゃべり出した。

「ん~、でも様子がおかしいだけでは、話が前に進まんね~。」

「はい、はいっ。」

大きく皿信満々に手を上げるのは、オーレの愛しの冷^{レイ}さん。今日も美し^い…

「はい、怜^{レイ}さん。お願いします。」

「はい、早川陣^{ハヤカワジン}は單刀直入に言つて、彼女が出来たのではないでしょ^ううか？」

自分の子供の話をしているとは思えなく^{くら}い嬉しそうだ。でも美しい…

美しい…

それにもしても、みんなの言つ通り、ソシヨウケ用くらこの陣は様子がおかしい。

玲さんの証言じやあ、夜遅く出て行く事が多くなつて、食事もろくでないといひし。

我々、「厚南倫理委員会」の會議で「恋の病」で間違いないとこう結論にたどり着いた。

「陣のやつも、とうとう童貞卒業かあ。」

マスターは最後まで口をはさんできた。

そんな事より、ソシヨウマスターと玲さんが前より仲良くなつていること
が気になつて仕方ない。確か以前までは、玲さんほどのことが気になつて、玲さんほどの店に来る事もなかつたのに…。

そんな事を考えながらオーレは家路につく。

自分の部屋に入るなり教科書を開き、勉強を始めた。受験生のオーレにとって一秒でも無駄には出来ないので。

。

「シゲミ
鶴^{つる}！」

一階から母の声がした。

勉強に没頭しすぎて時間を忘れていたみたいだ。きっと夕食の時間だろう。我が家の大食は一般家庭と比べて、少し遅い。父親の仕事の関係とかで20時～21時くらいになる事が普通。オーレは階段を降りてリビングに向かった。

すると、母親が出てきた。

「玄関に、ナカムラガナメ中村要君ナカムラガナメつて子が来てるけど。」

ナカムラガナメ
中村要…あ、モツサだ。

こんな時間に何の用だろう。不思議に思いながら玄関に向かった。すると、息を切らしたモツサが立っていた。

「ど、どうしたん？そんなに慌ててから。」

「はあ、はあ。タチバナちゃん。大変つちやー陣ジンちゃんが…、倒れて病院に運ばれた。」

モツサが慌てふためいていたものだから、とにかくシュークリームと牛乳で落ち着かせた。

それから、オーレたちは陣ジンが搬送されたと聞く病院へ向かった。

病室には、ベッドに横たわった陣、それを横で心配そうに見守る怜さんのお姿があった。

オーレとモッサは出口付近にいる一に声を掛けた。

「病状は？」

「お、タチバナとモッサかあ。軽い貧血みたいやけえ、心配ないよ。ただ…」

「ただ、なに？」

翌日、陣は退院した。

その日の午前中、オーレとモッサは、一に誘われて図書館にいた。調べる事があるとかで…

そして、夜になるのを待ち、陣が毎日のように来る、公園のそばでみんなとおち合つた。

「そんなに毎日、公園で激しい事しょんかね〜。」

「下ネタやん。」

「しょもない」のボケについてツッコミを入れてしまつた。

モッサは、晩飯を食べてないとかで、インスタント焼きそばを食べていたが、それをツツ「むほどオレはお人良じじやない。まあ、本人はボケて

いないと思つ

が。

「来たよ…」

ハジメの一言で、オーレとモツカは公園のベンチの方へ戻をやつた。

陣^{ジン}が一人で来た。

そして、ブランコに座り、何やら独り言をしゃべつ出した。女の子が来る前に予行練習でもしてこるつもりつか。どうせ、ロイシの恋の病は重症のようだ。

見かねた一は、速歩きで陣^{ジン}の元へ向かった。すかさず、オーレヒモツサも後をつける。

「陣^{ジン}、そのナはもういの世ではおいらさんよ。」

陣^{ジン}はその言葉で立ち上がり、一^{ハジメ}を睨み付けた。

「お前、アホかー美空^{ミソク}は田の前にちやんとあるやうがー！」

じばらぐ2人の会話の意味がわからなかつた。ただ、少なくとも、オーレヒモツサには女の子らしき姿は見えない。

「美空さん、お願ひします。陣^{ジン}を返して下さー。このままでは、あなたに生氣を吸いとられて、やつれていき、死んでしまいます。僕にとつて陣^{ジン}はかけがえのない人間なんです。どうか、返して下下さい。」

「

「は、やつらながら土下座して、『ト』を地面に擦り付けた。

すると、オーレの耳にさからともなく、女の子の声が聞こえはじめた。

「頭を上げて下さい…。そうでしたか…。私は死んでいたんですね…。」

「そんな訳ないやんーお前はちゃんと生きちゃつよー…。『テタラメ言つやー!』

感情的になつた陣とは反対に、一は顔を上げると穏やかに続けた。

「坂口美空、18歳。10年前、日差しの強い朝に「セントツ」の屋上から飛び降り自殺した。原因は不明。と、当時の記事に書いてあつた…。「めん、陣。おそらく、僕と一緒にいるせいで靈感が強くなつてしまつたみたい…。」

図書館に行つた理由がその時わかつた。一は、陣の恋人が幽霊だと気づいていたつて事なのか…

陣は、大きく首を振りながら、

「そんなん、うわじや…。」

一は立ち上がり、陣の肩に激しく手を置いた。

「いややないつちやー」のまま彼女とおつたり、生氣を吸いとられ死ぬよー。」

急に、一の背後がぼんやり光りだした。それを見た陣は一の手を振り払い、ぼんやりと光り出した方へ駆け寄ろうとしたが、一、必死で陣の体を押さえ、それ以上前へ進ませないようこした。

「お、おいつ！美空ミツコあああつ！行くなつ！まだ、お前の夢は叶つちよらんやううがあああつ…どっちが先に叶えるか勝負するんじゃないんかああ！」

「陣君ジンが叶えて…私の歌手になる夢…。」

「…何言こよんか！なら、せめて俺も一緒に連れて行けつ…ひとりでなんか行くな！俺がずっとお前を守るけええつ！」

「ダメ…絶対ダメ。」

陣ジンはさつきよりも強い力で一を振り払おうとするが、一はびくともしなかつた。ここで手を離してしまつたら陣ジンを連れて行かれると思つたのだろう。

オレとモッサは、なすすべもなくその場に立ち戻へす事しか出来なかつた。

「もつと早く陣君ジンに出会えれば良かつた…。そしたら、自分で命を終わらせるなんて馬鹿なこと考えなかつたのにね…。でも、もし…わがままな私のお願ひを聞いてくれるんなら…。」

その声の主は、静かに一言づつ大事にしゃべつていふように感じた。

「…私の生きれなかつた明日も明後日も生きて…唄つてほしい…。それで、その声を天国まで届けてほしい…。それなら、寂しくない

よ…。」

少し間をあけて、陣は何かをじりぐるよひに言つた。

「…それなら心配すんな。天国のどこにおつても聴こえるくらい、ぶちテカイ声で唄っちゃるけえ…。」

「ごめんね…。陣君を、困らせるつもりはなかつた…。ただ…ただ、一秒でも永く…一緒におりたかつただけなんよ…ごめんね…。」

その声が途切れると、一瞬辺りが光つた気がした。その光のあとにその声が聞こえる事はなかつた…

「謝るなあやあああっ！」

そう言つて、陣は膝から崩れ落ち、幼児の様に泣きわめいた…。こんな取り乱す陣を見るのは、後にも先にも初めてだつた。

決して結ばれない2人の恋が終わつた…

オカルト現象など信じないオーレにとつて衝撃的な日になつた。

ただ、これが眞実であるのなら、世界一美しい恋の終わりを叩きししたことになるだろう…

第09話 スタンド・バイ・ミー

幼い頃から、笑ったことのないと言つていた美空が、最後に笑つていた。

何を意味するかは知らないが、彼女を失つた俺にとって、それが唯一の救いだった。

一晩中泣き続けた後、不思議と気持ちは晴れていた。でも、今 日は学校をサボることにした。

そして、朝からマスターのところに行つた。

「カラーン、カラーン。」

「お、陣かあ。」^{ジン}

マスターは、事情を知つてか知らずか、学校をサボつたことも、俺の目が腫れ正在のことも突つ込まなかつた。ただ、黙つてコーヒーを出してくれた。

「マスター…。あのさあ…」

「ん？！何も言わんでもええ！大体の事は聞いたけえ！お前も失恋する年になつたか。世も末じやの〜！ハハツ。まあ、俺も若い頃は、いろんな恋をしたもんいや。」

「へええ。」

俺は、話が長くなりそつだったので、素つ氣ない返事をした。

「まあ、聞けッちや。お前と同じ年の頃な、大恋愛したんじゃけえ。

」

自分の事をあまり語らないマスターが、よりによつて恋愛話とは、かなり興味深い。

「黒髪のよう似合つ、綺麗な子やつたの～。」

「それで！？」

「まづい…。思つていた事がつい口に出てしまつた…。これでは、マスターの思う壺だ。案の定、マスターは勝ち誇つた顔をして続けた。

「猛烈アタックの末に、付き合へることになつてのよ。そりや、毎日バラ色のようやつたぞ。」

表現が古い…

「やけど、結局別れたんよ…。」

「なんでなん？」

「身分の違いつてやつやの。正確には別れさせられたんよ。彼女は、どつかの財閥の娘やつたけえ、こんな貧乏人とは付き合わせないつて言われたけえの。」

「それで、すぐ引き下がつたんつ！？」

俺はちゅうと熱くなり、声のボリュームが上がってしまった。

「いや、諦めきれんやつた。何度も何度も、そのままの家に行つてはボディガードみたいなじつに兄ちゃんにつまみ出された。悔しゆうで、悔しゆうでの…。何回も世間を恨んだいや。」

「わづか…。」

「陣。^{ジン}俺が何を言いたいかわかるか?」

「…。いや、わからん。」

「外人やろづが、同性やろづが、幽靈やろづが、一國のお姫さんでも関係ねえんよ!誰が誰を好きになろづが、自由なんぢや。ただ、本当に好きになつた女なら、誰に何て言われようが負けぢやいけん。これかも、よづけ（沢山）恋をするやろづけえの。よう覚えちよけ。俺はの、相手を見かけだけで判断せんで、正々堂々と誰がをまつすぐ好きになれるお前を、誇りに思ひよづ。」

その力強い言葉に圧倒されて、涙が止まらなくなつた。

すると、人が気持ち良く泣いている所に、荒々しくドアを開けて入つて来る人の気配を感じた。

「あ～、今日も暑いですね～！マスター。」

よく見てみると、ハンカチをうちわ代わりにしてあおぎ、ピッチリスースの男がなれなれしくマスターに話しかけた。
マスターは、その男を見ると焦った顔をして俺に言った。

「陣ー！もう、話は終わりじゃけ、俺はコイツと話があるだけ、もう帰れ！」

「お、おう。」

俺は、少し様子のおかしいマスターの表情に動搖した。そして、ピッヂリストーンの男を見るのは初めてだが、あいさつもせずにそのまま店を出了。外に出ると、もう昼過ぎで太陽が一番高い所にあった。今日は金曜日なので、路上ライブして気持ちを切り替えようと、自宅に帰つた。

俺たち「サンライズ」の路上ライブは2時間くらいと決めていた。最初の頃は6時間や8時間はやっていた。だが、それは路上ライブではなく、ただ自己満足に過ぎず、誰も楽しんでくれない。

お客様さんが楽しんないと、俺たちが成り立たない。最近その事に気付き、ライブ前に俺ん家に集まり、曲順やトークの内容も考える。フリー・ハンドではあるが、毎回チラシも作るようにした。

今日も少人数ではあるが、俺たちの唄を聴きに来てくれる人たちのお陰で、大盛況でライブが終わった。

まだ、ライブの興奮が冷めやらぬ中、一^{はじめ}が俺に真顔で言った。

「新川行こうぜー。」

「ええけど、どうやって？」

「線路を歩いて行こうや。」

「」の宇部駅から新川駅までに3駅ある。距離にして約5～6キ

ハジメ 口。でも、少し面白そうだったので軽く返事をしてしまった。

「練習が必須。」らしい。

それに、電車が1時間に1本しか通らないので、1時間以内に新川駅までに到着しないと、大変なことになる。

一が、俺の気を紛らわせようとしてくれているのはありがたいが、少し危険な臭いがする。

20時台の電車が宇部駅を出発するなり、俺たちも出発した。線路は、電車の為に作られたもの。だから、人間の俺たちは当然歩きにくい。やたらでかい石があつて、その石が足の裏のツボを刺激して、ほどよく痛い。

「陣、覚えちゅうか。昔よーいの辺で遊びよったね。」

ハジメ
一が指したのは、第一公園。本当は違う名前だと思うが、俺たちはそう呼んでいた。

線路側から見るのは初めてだが、懐かしい。

「やつやの~。毎日こうんな事語りよつたの~。」

しばらく歩くと、厚東川の鉄橋に差し掛かった。

「おとかとか思つナビ。渡るん?」

「当たり前やん。」

一^{ハジメ}が悪そうな顔をした。

厚東川に掛かる鉄橋は500メートルはある。もし、渡つてゐる途中に電車でも通るもんなら、川に飛び込むしか生きる道はない。でも、海まで通じてゐるせいで、干潮の時間帯は極端に潮が引いてゐる。要するに、飛び込んで大惨事つて事。突き指だけで済みそうにない。

一^{ハジメ}をふと見ると、顔は冷静を装つてゐるが、内心は逃げ出したいままないと言わんばかりに、手足が震えている。小さな物音にもビクビクしながら、俺たちは鉄橋をなんとか渡りきつた。

しばらく歩くと、田の前の信号^{サイン}が変わり、遠くで「カンカンカンカン」と聞こえてきた。

「やべえ、電車来た！」

そつ、言いながら俺たちは猛ダッシュで線路の上を走つた。田の前に、岩鼻の駅が見えた。

即座に、ホームにかけあがり、難を逃れた。

「はあ、はあ。死ぬかと思つた。」

「よし、電車も行つたし。あと一時間は安全じやけえ、安心して進めるね。」

今さらながら、一^{ハジメ}はヘタレのくせして好奇心だけは旺盛だ。

また、しづらへ線路の上を進むと、先頭の一^{ハジメ}が急に立ち止まる。

「あ、何かあるー。」

一^{ハジメ}の指差す方を見ると、林の中でぼんやりと輝く物体を見つけた。

「ん~、幽靈かなんか?」

俺は、一^{ハジメ}のお陰で幽靈を見ても驚かなくなつた。

「うふ、『背の高いおつさん』が向いの側を指差しちょつーその方向に向かあるんかねえ。」

確かに、言われてみればそう見える。一^{ハジメ}はすぐさま脱線し、林の中に走つて行つた。

「おいつー趣旨変つてぐるやんー!」

俺はそう言いながらも、一^{ハジメ}を追いかけていた。林は俺の胸元まで生えていて、おまけに地面は湿つている。そんな事もお構いなしと言わんばかりに一^{ハジメ}は草をかき分けながら進む。『背の高いおつさん』が指差している辺りに来てみると、黒いアタッシュケースが落ちていた。そんなに古くないが、見るからに怪しい。

「あの『背の高いおつさん』の、落し物なんかね?」

そう言いながら、一^{ハジメ}と俺は『背の高いおつさん』の居た場所に田をやつた。

「おひんぐなつちゅう。」

と、俺が言つると同時に「なら、開けてみよ。」と、一はいつもの傍若無人ぶりを發揮した。

「おい、一^{ハジメ}やめちよけー爆弾とかやつたらどうするんかー。」

「カチヤツ。」

俺の声は、届かなかつた。

「おおおおおおー。」

アタッショケースを開けた一^{ハジメ}が急におたけびをあげた。

「どうしたん? 何が入っちゃつたん?」

「陣^{ジン}…。ヤバい。僕ら…大金持ちやん。」

一^{ハジメ}は、そう言いながら一万円の束を自分の頬に当てて見せた。驚いた俺は、すぐにアタッショケースの中身を確認した。中には、大量の札束が二千寧にも並べてあつた。

「や、やべえ…ほんとじやー。」

「つおおおおー。」

とにかく、俺たち一人は高校生らしく、絶叫することにした。

「誰が、何の目的で、どうやってここに置いて行つたんかねえ。」

「ハジメの一の言ひ通りだ。俺たちは、何か大きな事件に巻き込まれてしまつたのか。」

「さつきの『背の高いおつせん』がキーパーソンってことやの。」

「ん? キーパーソンってなに?」

「…。鍵を握つた人物つてこと…」

「ああ、そつちの事ね!」

どつちの事だ! 俺は、確かに学校では馬鹿だと思われている。でも、あくまでペーパーテストが出来ないだけ。なら、『キーパーソン』も知らない一は、俺以下つてことだ。

「とにかく、ここに置いちゃつてもしょうがないし、持つてこいつぜ!」

俺はそう言つと、大事そうに札束を持つ一からお金を回収し、アタッショケースを持つて線路まで歩いた。
なぜかそのまま、俺が持つはめになつたアタッショケースは、大金を入れてゐるだけあって、かなり重い。

「んで? 宇部駅に戻る?」

「いや、新川まで行こうや!」

「え? こんな大金持つて行つたら怪しくない? いつたんどうかに隠そうや!」

「一回行くつて言つたら行くべつちやーー！」

ハジメ
一の頑固も^{ハジメ}ここまで来ると、ただのダダッ子だ。

そして、新川駅に着いた。切符を持っていない俺たちは、改札口を通りずに近くのフォンスを乗り越えて行くことにした。

「おい！何しよんか！運賃払わんか！」

駅員に見つかってしまった。

「僕たち、電車に乗つてしません！」

「嘘つくなーなら、なんでフォンスよじ登りよんか！」

おっしゃる通りだ。

でも、今の俺たちは、大金を持っている以上、簡単に捕まるわけにもいかない。

逃げる俺たちを、執念深く追いかけてくる駅員さん達。車に乗つて追つかけてくる人も出てくる始末。そこまでしなくともと、思うくらいの人数に追い回された。

後から聞いた話によると、この地域で無賃乗車が多発している事から、今が『無賃乗車撲滅強化月間』だつたらしい。

なんとか、俺たちは『そこまでしなくともと、思つくらいの人数の駅員さん達』から逃げ切る事が出来た。

次の日のホームルームで、担任が生徒に向けて今回の騒動を連絡

事項として話している時、俺たちは優越感に浸っていた事をよく覚えている。

そして、この時から俺たちは、徐々に大事件の表舞台に出て行く事になる…

第10話 2つの事件

「ぜ、全部で、5380万円あるっちゃん！」

「おおおおお。」

俺たちは、タチバナの一言で、事の重大さを改めて知った。

「林の中にアタツシユケースね…。怪しそうなやつ…。何かの事件に巻き込まれる前に、警察に持つて行こうやー。」

確かに、モツサの言つ通りだつた。

「ん~、まあ、待てっちゃん！ 警察ならいつでも届ける。今は、何でこんな大金が林の中についたのかが重要やろ？ ん~、考えられるとすれば、『マフィア同士の抗争に必要な軍資金』

『銀行強盗した犯人が逃走中に仲間に裏切られ、殺されると気づいた一人が、金だけをあそこに隠した』

『コヌーティヌティラナ星人の侵略を防ぐために立ち上がった防衛軍が、全員疫病に感染してしまい全滅。そして、残された運営費と地球の運命。』 くらいかな。」

「リアリティ、ゼロかつー最後の方とか、完全に作り話やし。タチバナの空想はマニアックなそっちゃん！」

ハジメ
「一の言つ通りだ。」

俺たち4人は、かれこれ2時間も出口のない討論を繰り広げている。

アタッショケースは、俺の部屋にある押し入れの奥に、とりあえず隠してある。

その流れで、学校帰りに俺ん家で2時間前から会議を開いていると、言つわけだ。

「まあ今はさ、何で大金が落ちちよつたかを追究してもしょうがないけえ、こにお金をどう使つてか考えてみん?」

さつきまで「警察に持つて行こい。」とか、言つていた人間の発言とは思えないが、モツサにしては、良いこと言った。

「やうやの、これ使ってアジト的なものでも作っちゃひへ。」

俺の意見に、始めて乗つかったのはタチバナだ。

「ええの、そつ言つのあつたらクソかっこええやん!」

「じゃあさ、ライブハウス作ろ! やー。」

ハジメ
一らしに意見だ。

「いいねえ! 観葉植物いっぱい飾つてさあーあと、キッチンは広めにね!」

モツサが、食べ物以外の事で感心を持つていてることに少し驚いた。

「世界各地のお酒とか、絵画とか本とか置こいやー! でもまあ、実際に理想のライブハウスなんて作ろ! と思つたら予算オーバーやけどねえ!」

タチバナは、ズレた眼鏡を戻しながら、俺たちを現実に引き戻すような事を言った。

「でもさあ、僕らでいつか本当に作りたいね。」

一は、遠い目をしながら言った。
ハジメ

無言で俺たちも頷いた…

「名前は『キング』がええ！一般的には王様って意味やけど、『最大のもの』って意味もあるんよ。ちょっと無理やりやけど、『僕たちの最大の夢の果て』って意味で『キング』ってどう？…」

ハジメ
一は、興奮ぎみに言った。

「『僕たちの最大の夢の果て』かあ、何かブチすぐえやん…なら、俺らのライブハウスは『キング』に決まりじゃあや…」

俺も、触発されて興奮ぎみになってしまった。

この時の俺たちの田は、若さゆえに希望に満ち溢れていた。何の先入観もなく、どんな事に対しても素直に目を向け、制限なく夢を見っていた。そして、大人になれば車にも乗れるし、学校にも行かなくてもいいし、先生や親に縛られる事もない。今以上に自由に生きられるんだと、本気で信じていた。

「そう言えば話変わるけど、陣。マスターの事、聞いた？」
ジン

楽しい会話の中、タチバナは意味深な事を言い出した。

「ん？マスターが何なん？」

「昨日、夕方くらいに店の前をたまたま通ったんだよ。そしたら、マスターに会つてさ。理由は知らんけど、店閉めるらしいよ。」

「え？何それ！初耳つちや！」

マスターは、俺には何も言つてくれなかつた。

ふと、あの時マスターズカフェに来た、ピッチリスースの男の顔が頭の中を過つた。

「あ…。ちょっとじめん、マスターん所行つて来るー。」

俺は、討論の途中ではあつたが、嫌な予感がしたので、急いでマスターズカフェに向かつた。

夕方だと言つのに、外に出るなり汗が吹き出した。

5分ほど走るとマスターズカフェの看板が見えた。店はタチバナの言つ通り、閉まつっていた。

ガンガンガンツ。

俺は、壊れてしまいそうなくらい扉を叩いた。

「マスター！マスタああー！」

うんとも、すんとも言わない。

父親の顔も知らない俺にとって、マスターは父親同然の様に慕つてきた。

でも、今になつてよく考えたらマスターに関して俺は知らない事が多すぎる。知つていい事とすれば、バツイチで前の奥さんは怜と高校時代からの親友つて事。あと、地元は大阪だつたと言つていたくらいだ。

いつの間にか、辺りは真っ暗になつてしまつていた。

俺は、どうしようも出来ず、ズボンのポケットに手を突つ込んで家路に着いた。家の扉を開けると、俺の部屋から数人の話し声が聞こえた。アイツらは、まだ帰つ

てないようだ。その足で、リビングにいる怜に話しかけた。

「怜、マスター？」に行つたか知らん？」

「ん？、陣じゃん！帰つちよつたんやね～。マスター？見てないね～、ス

ロットじゃない？」

ビールを飲みながらテレビを観て、適当に俺の質問に答える姿に少しイラッとしたが、もつと許せないのは怜の格好だ。自分の子供の友達がいるつつうのに、ド・ピンクのランジェリー姿。母親じゃなければ、ぶん殴つている。

タチバナに見られでもしたら、「ほげ～つ」なんて言ひて、鼻血出して失神してしまつだろ？

「ほげ～つ。」

：遅かつた。

タチバナは、冷蔵庫の前で鼻血を流しながら倒れた。後頭部を強打したらしく、のたうち回つていた。おやりく、ジュースか何かを取りに来たんだろ？

「おい、怜！服着ろっ！思春期の子供には、刺激が強すぎるやうつ
がつ！」

「え～、だつて暑いんやもん。」

と、ダダをこねながら、怜はビールのおかわりを取りに冷蔵庫の方へ歩き出した。

まずい、またタチバナに見られてしまつ。次は、確實に失神する…。

「あら？ タチバナ君。こんなとこで何しよん？」

タチバナは、その声に気付き怜の方を見るが、「おふつ。」と言
いながら、鼻の両穴から噴水のごとく血が吹き出した。

「あ、怜さん。お邪魔ちいてますい…。」

タチバナ自身は、冷静を装っているつもりのようだ。でも、俺には白目をむいて倒れている哀れなヤツにしか見えない。

「タチバナ君、すごい鼻血…。大丈夫！？」

「お前のせいじゃ！」

あまりにもの無神経さに、実の母親にツッコんでしまった。そんな茶番劇が終わると、モツサ^{ハジメ}と一毛リビングにやって来た。

怜は渋々、短パンとTシャツに着替え、先程とは打って変わつて真面目な顔で、ソファに腰掛けた。そして、壁の方を見たまま重い

口を開いた。

「松園組って知つちよ、う？」

いきなり何を言い出すのかと思えば、全国的に有名なヤクザの名前だつた。俺は、話の続きが気になつたので「お、おひ。」とだけ言つと、次の言葉を待つた。

「幹部が大阪にあるんやけどさ、どうやら内部でございじやがあつて、裏切つた仲間がどうやらこの辺りに逃げて来たみたいなんよ。」

「え？ それとマスターの失踪つて関係あるん？」

俺が返そつとした内容を、一々言われてしまつた。

「大アリなんよ。マスターは、松園組の組長の弟なんよ。そんで、ゴタゴタを起こしたのが、マスターの元舎弟なんよ。そんで……。」

あまりにも驚きの内容に、怜^{レイ}がしゃべり下手だといつことを忘れていた。

どうやら、マスターは松園組の元幹部で、ヤクザから足を洗い山口県で静かに暮らしていたと言つ。

今回、松園組の中で抗争が起こり、主犯格が山口県に逃げ込んでいるそうだ。怜の話では、マスターはその元舎弟を匿うために失踪したのではないかと言つ事だった。

「つて事は、今この街には危険きわまりない松園組がウヨウヨいるつて事ですよね。怜さん、夜の一人歩きは気を付けて下さいね。」

さつきまで横になつていたタチバナが、ある程度落ち着いたのか

おもむろにしゃべりだした。

「陣、じゃあ僕たちが林の中で会つた『背の高いおっさん』も松園組と何か関係ありそうやね。主犯格の一人やない？」

ハジメ
一の言つ事が確かに、すでに死人が出ている大事件になる。そうなると、大金と松園組は繋がっている事になる。俺たちは、拾つてはいけないモノを拾つてしまつたに違いない。皆もその事に薄々気付き始めているのか、顔色が悪くなつた。

18年間生きてきて、初めて命の危機を感じた。もし、このお金がヤクザのものだったら、俺たちはどうなるのか？

「どうやって見つけたのか？」と聞かれても、口が裂けても幽霊に教えて貰つたなどと言えるはずもない。そうなると、今回の抗争に俺たちが関わつていると誤解される可能性が高い。きっと、拷問にかけられて、富士の樹海に捨てられるか、ドラム缶に入れられて海上に沈められる。

こんな平和な時代に、命の危機に直面している高校生など全国探しでもいるはずない。

なぜ、俺たちなんだ… 考えれば考えるほど吐きそうになつてくる。

「うう…」

モツサは、両手で口を塞いだ。おそらく、俺と同じ事を考えただろうつ…

さつきまで賑やかだつたりビングが静まり返り、バラエティー番組が流れるテレビの音だけ悲しく響いていた。

第1-1話 不可解な点が多いショーンメール

「この世界の裏側で今、何が起きているかなんて知らない。

ワイの生きているこの街にも、ワイの理解を越える出来事なんて沢山ある。それは当然の事だけど、そう考えると少し怖い。

今、まさにその理解を越える出来事が目の前で起つた。授業中にもかかわらず、開いた携帯にメールが届いていた。中身を見ると、一気に血の気が引いた：

「岩鼻公園の都市伝説。昔、岩鼻公園が「第一公園」と呼ばれていた頃。怪事件が多発しました。内容は、通りすがりの人達の鼻が切断されると言うものでした。被害者は、犯人の顔を見ておらず、ただ「背の高い中年の男」と言う事だけしかわからなかつたそうです。被害者は何百人にも膨れ上がり、警察は頭を抱えていました。そんなある日、公園の近くを通りすがる背の高い中年の男に職務質問をしたところ、急に男が逃走。そして、逃走中に男は車にはねられ死亡。一件落着かと思いきや、後日、真犯人が出頭して來たそうです。動機は、ただ鼻を集めたかったからとの事。警察の誤解で事故に追いやつてしまつた「背の高い中年の男性」の遺族に、後日慰謝料が支払われたが、そのお金を受け取つてすぐに家族全員が第一公園付近の岩に頭を強打し、自殺。多額の慰謝料も見つかることはなかつたそうです。その無念な思いから、街の人たちは「岩鼻公園」と呼ぶようになったそうです。このメールを見た人は、今から3日以内に3人にこのメールをまわして下さい。そうしないと、祟られてします。」

よくあるチョーンメールだったが、話がやけに出来過ぎている。確かに、陣ちゃんと一ちゃんが大金を拾ったのは岩鼻公園駅付近。要は、岩鼻公園の近くつて事だ。それに、『背の高いおっさん』の幽霊を見たと言っていた。

ワイは、早くこの事を知らせたい気持ちと、心のどつかで「祟られるのも嫌だなあ」という気持ちでいっぱいになり、とっさに陣ちゃんと一ちゃんとタチバナちゃんにメールを転送した。

すると、後ろ姿ではあるが、3人の仕草で携帯のバイブが振動し、メールが届いたのがわかった。それぞれ、先生の死角を使い器用に携帯を取り出しメールをチェックしていた。

しばらくすると、またワイの携帯にメールが来ていた。今度は3通も。中身を見ると、ワイが3人に送ったメールがそれぞれ転送されて返ってきた。

これを世に言う「チョーンメール返し」だ。今度は9人に送らないといけないと思つと、頭が痛い…。

放課後に中庭でみんなと合流して、緊急ミーティングをした。内容はやはり「不可解な点が多いチョーンメール」だった。

最初に話を切り出したのはタチバナちゃんだった。

「ん~、なんかタイミング良すぎやろ~」

「ん? 何が? メールの内容の事?」

ワイは、話についていこうと必死に質問した。

「内容もやけど、そもそもこんなメール自体送られてくるのがおかしい…。陣たちがアタッショウケースを拾ったのは2、3日前なのに、もうその内容に触れたメールが出回っちゃう。あれはオーレ達しか知らんはず…。送った犯人がその場にいたか、この中の誰かがチクつたとしか考えられん…。」

そう言つと、タチバナちゃんは疑いの目でワイの方を見た。一瞬、背筋が凍りついた。

「ちよ、ちよっと待つてえや！ワイが他の人に言つわけないやろー。」

必死の弁解にタチバナちゃんは、ニコツと笑いながら続けた。

「嘘いや、オーレ達の中に、そんな事するヤツなんておいらんに決まつちゅうやんー。ごめん、ごめん。」

ソレを聞いて、ワイは「ほつ」とした。

そう、タチバナちゃんの言つ通りワイ達は固い絆で結ばれているんだから疑う事すら馬鹿馬鹿しい。

「まあ、とにかく、メールの件、『背の高いおっさん』が教えてくれたお金の件、そんで、マスターの失踪…。全部いつぺんに考えても埒が明かんけえ、手分けして真相を確かめようぜー。」

流石、陣ちゃん。この人は、いつもビシッと筋の通つた事を言つ。このしつこくないリーダーシップがみんなから愛される由縁なんだるわ。

結果、ワイとタチバナちゃんはチーンメールの出所を調べる。

とに。一ちゃんは、もう一度『背の高いおっさん』の幽霊を見付けてお金の出所を調べることに。そして、陣ちゃんは、マスターを探す事になった。

ワイとタチバナちゃんは、まずワイにチョーンメールを送つてきました北島くんに会いに、彼の家に向かつた。

図々しく、家の中に上がり込み話を聞くと、彼もメールを送られた側の人間と言う事がわかつた。メールを送つてきたのは、同じクラスの田中くんだつた。

すぐさま、彼の家に向かつた。そして、本人に直接話を聞いたが、田中くんもメールを送られた側だつた。そうして、4～5人の家を回つた頃、気分の悪くなるような名前が浮上してきた。

「近藤」だ。

そう、中学の時に散々いじめられたヤツだ。正直言うと、名前を聞くだけで辛かつた思い出がフラッシュバックするほど嫌だつた。タチバナちゃんも、その過去を知つてるので、「ここからは、オーレひとりでやる。」って言つてくれたけど、ワイは「気持ちは嬉しいけど、一緒にやらしてほしい。」と返した。

それは、過去の自分から逃げたくないのと、今は昔とは違い、信頼できる仲間がいるからだ。

近藤は噂によると、高校には行かず、山口県では有名な暴走族『トップブラザー』の総長をしていると聞いた。

どうやら、メールの出所はトップブラザーのメンバーからのようだ。今日は、夜も遅くなつたという事で、調査は次の日に繰り越され

た。

家に帰り、お風呂に入ると、自分の手の震えによつやく気付いた。ヘタレで優柔不斷なワイが、何かの目的のために危険をおかそudgeしている。その震えは、恐怖からでもあり勇気の現れにも感じた。

次の日は、思つたよりも永く感じた。

その日は、退屈な終業式だつたが、長い夏休みの始まりを告げる合図でもあつた。

これからは、存分に事件の真相を追及できる。

今日も一度、中庭に集まり、中間報告をしてバラバラに動いた。ワイたち以外は進展なしのようだつた。

タチバナちゃんとワイはトップブラザーの溜まり場になつてているユーズボールに行つた。

ユーズボールは、娯楽の少ないこの辺で唯一のアミユーズメント施設。子供から大人まで楽しめるだけでなく、学校の友達と会いたければ大概是「ココに居る」というくらい、街の人から愛されている場所だ。

ワイは、初めは近藤コンドウを探す使命感でいっぱいだが、あまりにも楽しそうな格闘ゲームを見つけてしまい、ついついお金を入れてプレイしてしまつた。

時間を忘れるほど熱中していたワイの肩を、誰かが強めに叩いた。ワイは、とつさにタチバナちゃんだと判断し、「「めんつ。」と言ひながら振り向いた。

すると、そこにはタチバナちゃんと似ても似つかない大男の姿があり、何人もの柄の悪い人たちを従えていた。

「よう、モサー。まだ生きちよつたん?」

その声を聞くだけで血の気が引いていくのがわかつた。右頬に縫い傷があり、獣のような冷酷な目、紛れもなく近藤本人だった。

近藤は、ワイを舐めまわすように睨みつけるとこう言つた。
「お前ら、でしゃばり過ぎつちゃ…。お仕置きせんといけんのお、モサー。」

その獣のような目玉が一瞬、獲物を捕らえたかのように鋭く尖つた様に思えた。

第1-2話 仲間はブチ大事にせんこやいん

夏休みに入つてまだ一「日田」だといつので、俺は学校の職員室の来客用のソファに腰掛けていた。

昨日もマスターの消息に繋がる手掛かりすら見当たらなかつたのに、こんな所で油を売つてゐる暇なんてない。

でも、目の前には見事にハゲ散らかした教頭が、腕を組みながらギヨロリと俺を睨み付けていた。

朝だと言うのに既にサウナ状態の職員室。

中には俺とハゲ散らかした教頭と体格の良い体育教員だけ。「絵的に寂し過ぎる」と心中で訴えかけながら、教頭の「デコから頬にかけて汗が弧を描きながら流れるのを見届けていると、咳払いと共に教頭がしゃべりだした。

「早河、正直に言つてみろ。お前がやつたんやろ?先生は別にな、怒つちよるわけや

ないんぞ。ただ真実を話してもらいたいだけなほっぢや。」

「知りません。僕じゃありません。」

「この件はもう二回目だ。^{くだり}

少し前に、無賃乗車に間違えられた件で今頃になつて問題になつてゐる様だ。『無賃乗車撲滅強化月間』だつた手前、犯人を捕まえたと面目丸つぶれつて訳だ。

そんな出口の見えないやりとりをしていくと、突然ノックもせずに

職員室に誰か入つてくるのがわかつた。

「陣^{ジン}！ 大変つちゃ！ モツサが拉致られた！」

「た、 橘君^{タチバナ}！ なんで君がここにあるんか！」

教頭は間髪を入れずに、 学園始まつて以来の天才児に対し敬意を払い、 君付けして怒鳴つた。

「拉致られたつて、 あんな団体のやつが誰に？」

「トップブラザー。」

俺の質問に待つていたかのようにタチバナが答えた。

「トップブラザーつて、 お前らー あんな危ない連中と関わるなつ！」

教頭が言つのも無理もない。 トップブラザーとは、 山口県で一番有名な暴走族で、 良い噂なんか聞いたことない。

「まあ、 とにかく行こうや！ 詳しい話は後でする！」

タチバナのその言葉を信じて立ち上がるうとした瞬間、 教頭が俺のカッターシヤツの袖を掴みながら「まだ話は終わってないやううが。」とすごい剣幕で俺を睨んだ。

俺は心を落ち着かせて、 教頭の頭を指差し「あ、 抜け毛。」とだけ言った。

すると、 教頭は袖を握つっていた手を離し、 即座に自分の後頭部を撫でながら「え、 どこ？」と俺に真顔で訪ねてきた。

俺は、ハゲ散らかしているにも関わらず、抜け毛を気にして育毛剤を使っている事は以前から知っていた。手が服の裾から離れるのを見届けると、すぐに俺とタチバナは職員室を飛び出した。

廊下を走り出して間もなく、頭に血が上った教頭と、空氣を読んで飛び出して来た体育教師が追いかけてきた。

後ろに氣をとられていたら突然、仁王立ちになつて行く手をふさぐ担任の野田清道^{ノダキヨナミ}が視界に飛び込んできた。

後ろからは、血眼になつて追いかけてくる教頭と体育教師。俺たちに逃げ場はなくなつた。「もう、駄目だ……」そう思った瞬間、肩の力が抜けて走る速度も徐々に失速し始めた。

「早河！橋！廊下は走るなつて小学校の時に習わんやつたか！？」

「先生！それどこひりじやないそつちゅーモッサが、いや中村が拉致られてつーとにかく大変なんよー！」

俺は、この数秒で理解してもらひえるとは思わなかつたが、とにかく必死にしゃべつた。

「そりが、なら行け！仲間はブチ大事にせんこいやいけんけえのー！こじは任せで、早く行け！」

「え？」

「聞けんのか！早く、中村を助けに行って来いって言ひよんじや

！」

ナカムラ

「は、はい！！」

あの説明で味方になつてくれた野田先生の理解力の良さと不器用すぎる優しさに、少しひびきながらも、声を合わせて返事をした。

「うちの担任は日本一男氣がある人」と、心の中で叫びながら。

俺たちは、野田^{ノダ}の横をお辞儀をしながら通過し、下駄箱を通り抜け玄関から堂々と外に出て行つた。

タチバナの話では、昨日コードボールでモツサとはぐれてしまい、一晩中探したが見つからなかつたと言つ。

そして、今朝になつてモツサの携帯を使ってトップブラザーのメンバーから電話があつたと言う。内容は、モツサの命と引き換えに俺たちが拾つた現金を渡せとの事だつた。取引場所は宇部港の第三倉庫付近。

「つうか、何で俺らが現金拾つたこと知つちよん？」

俺は、タチバナに問いかけても答えは返つてこないのはわかつていた。

「知るか！そんなん、オレの方が知りたいわ。」

でも、誰にこの気持ちを伝えればいいのか分からなくて、つい質問してしまつた。

宇部港付近まで来ると、いかにもこの辺りで裏取引が頻繁に行われ

ているかのような景色だった。

映画のセットみたいに不気味に立ち並ぶ倉庫は、大きな扉に数字が書いてあった。「〇三」と書かれた倉庫の前に来ると、無数のカスタムされたバイクが至るところに置いてある。そのバイクの一つ一つにトップブラザーのエンブレムが刻まれてある。

「……で間違いないみたいやのぉ。」

タチバナは、俺の横でボソッと口にした。

俺は「そうやのぉ。」と言いながら、大きな扉の右下にあるドアの前に立つた。そして、ゆっくりとドアノブを回すと「キューイー」と鳴りながら扉が開かれた。

第1-3話 伝説の不良

中は薄暗く、倉庫にしてはたいしてものは入っておりず、テニスコート分くらいのスペースがあった。

そこには、20人くらいの白い特攻服を着た柄の悪い兄ちゃん達が居て、一斉に二つ巴を見た。

「あ、クソ。このドアの音のせいで気づかれたあやー。」

「ハハ、ヤバ。物のせいにしない。」

タチバナは冷静にツッコミを入れた。

奥の方から総長らしき大男がバットを右手に持つ、ゆっくりと前に出てきた。

「おう、金を持ってきた様には見えんけど、一人だけで何しに来た？」

「そう、タチバナに考えがあるらしく俺たちはアタッシュケースを持ってきていた。」

「オレ達も馬鹿じゃないけえの。はい、そうですかつてお前らの言つ通りにするわけにはいかんいや。どうせ、持ってきたところで真っ当な取引なんてできん。金は、ある場所に隠してきた。お前らが取引に応じるんやつたらその場所を教えちやる。」

「おおおー。」

俺は、感動して思わず声を出しちゃった。

「んで、どんな取引なん?」

総長らしき大男は、動搖するのでもなく淡々と質問した。

「オレ達の質問にこいつが答えてもらひて、モッサを返してもらひ。」

と、タチバナが続けると総長らしき大男は眉間にしわを寄せながら言った。

「なんか面倒くせえ…。おい、お前り。マイシラ半殺しだして金のありか聞きだせ!」

その言葉を命懸けの氣の糸に連中が「おおおおお!」と叫ぶながらゆきつくと俺たちの所まで歩き始めた。

「い、いひつけの。御子柴さんミコシバが付こちよるんやけえのーー!」

それを聞いたタチバナがすかさず俺の頭を平手打ちした。

「馬鹿つ! 存在もせん人の名前なんか出してても、何の脅しだにもなんやうひがー!」

タチバナの叫び通りだ。

「とつれで出来てしまつたんじや、ボケつー!」

と、見苦しい反論をするしかなかつた。

すると、トッププログラマー達はざわつき始めた。そして、スキンヘッドの男が総長らしき大男のところまで行き、囁くように言った。

「御子柴さんってあの伝説の不良ですね？不味くないですか？」

それを聞いた総長らしき大男は、生睡を飲み込むと困惑した表情をみせながら俺たちに叫んだ。

「御子柴さんと知り合いとは、お前らもなかなかの器つちゅう」とやのーわかつた、質問には答えちゃる。」

その意外すぎる反応に、タチバナと俺は開いた口がふさがらなかつた。

「すげえ…。オーレ達の嘘つてこじまで大きくなっちゃんや…。」

タチバナはそう言った後、気持ちを落ち着かせるように胸に手を当てた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「まあ…モツサは生きちよるんか？」

総長らしき大男は不敵な笑みを浮かべながら、後ろの方を指差した。そこには傷だらけのモツサが、紐に縛られて申し訳なさそうにこっちを見ていた。その姿を見た途端、俺は少し安心した。タチバナはモツサの無事を確認すると、落ち着いて質問を続けた。

「次に、何でお前らが金の事を知つちよるんか？あれは、オーレ達しか知らんはずやん…。」

その質問には俺が答えると言わんばかり、わたくしのスキンヘッドの男が俺たちの方に向かって歩きながらしゃべりだした。

「はじめまして。私は河嶋カワシマと申します。ちなみに、このチームの総長はあなた達がさきほどからしゃべっている近藤コントウと申します。以後お見知りおきを。」

河嶋カワシマのたち振る舞いは暴走族であつながら、どこか気品を感じさせた。

「おひと、なぜかどこの質問に答えなければなりませんね。我々は、言つまでもなくアップブラザーという暴走族です。我々がこの地でのびのび羽を伸ばせるのは松園組の恩恵を受けているからでして。その松園組のお金が盗まれたとあっては、我々は黙つて見過ハグす訳にはいきません。」

あくまで丁寧にしゃべりつゝある河嶋カワシマにしびれを切らしたのか、タチバナが話を割つた。

「要するに、松園組への恩返しのためにモッサを拉致つて金を取り戻そうつて訳か？」

あの大金が松園組のものだとすると、やはりマスターほこの事件に絡んでいるに違いない。

話に割り込まれたことには何も動搖ハラハラすことなく河嶋カワシマは続けた。

「ええ、その通りです。あなたはやはり頭が切れますね、橘氏タケミでも、あなたの質問は『どうしてあなた達がお金を持っているのを知つているのか?』でしたね。」

その回りくどい質問にタチバナは「うん。」と答えると、河嶋の言葉を待つた。

「実は、松園組の中で内部抗争がありました、その主犯格がこの宇宙部に逃げ込んだという情報が先日、我々の耳に入ってきたのです。そして、松園組と我々の総力を結集し、血眼になつて捜索した結果、見事に主犯格の男を確保しました。彼が組から奪つたお金をあなた達が持つているという事実にたどり着くのには、さほど時間はかかりませんでした。」

「発信器つてことか？」

河嶋は右手の人差し指を自分の口の前で左右に揺らし「チッチッチ。」と口を鳴らした。どうやら、少しナルシストらしい。

「残念ながら発信器は使っておりません。第一、彼らがどんな力バトンにお金を詰めていたのかもわからないので、付けようがありません。単刀直入に言いますと、我々があなた達を見つけたのではなく、あなた達の方が我々を見つけたのです。」

河嶋の上からしゃべるスタイルに、俺はイライラしてきた。だが、ここで暴れても勝ち目はなさうなので大人しくすることにした。そんな俺の気持ちを知つてか知らずか河嶋は俺にしゃべりかけてきた。

「早河氏、あなた以前スラッと背の高いスーツ姿の男と会つていませんか？」

俺はすぐにソレがマスターの店で会つた、ピッチリスーツの男で

ある事を言つてゐるんだと気づいた。

「お、おお…。しゃべってはねえけど、会つた事はあるぞ。それがどうしたんか?」

「その人は松園組の幹部の一人です。あなた達がマスターと呼ぶ方の所へ彼が訪れた時に、深刻そうな話をしていたのを見たと証言して下さった。おそらく、あなたにお金のありかを伝えたか、何らかの情報のやり取りをしたのではないかと、私は仮説を立てました。そして、あなた達を誘い出すために、少し幼稚ではありますがチエーンメールを回したのです。人間は自分に不利益な事が降りかかると犯人探しをする生き物ですからね。あなた達は当然、メールの発信者を探します。飛んで火に居る夏の虫とはこの事でしょう。へへつ、まんまと自らがお金を持っていると言つてきました。我々は一度たりともあなた達が持つてゐるなんて言つていません。」

確かに俺たちは、勝手にお金の事がバレたと勘違いして、自ら召乗り出でしまつた。だが、マスターはお金のありかを伝えたのではなく、むしろ俺達に迷惑をかけまいと何も告げずに失踪した。そのきっかけを作つたのはピッヂリースーツの男だ。

「ところで、ピッヂリースーツの男はマスターに何を言つたんか?」

俺の質問に河嶋カワシマは快く答えた。

「あなたの舎弟を拉致したと言つたそうです。マスターは『もう足を洗つた世界の弟分なので、俺には関係ない』と返したそうです。」

でも、マスターの事だから、舎弟の人の為に自分の今の地位を投げ出して助けに行きかねない。あの人はそう言う人だ。

「おい、早河とか言う奴よ。お前のお人好しぶりにはヘドが出るんじゃ！このデブでしか取り柄のない駄目男といい、ヤクザかぶれのボロい店のマスターといい平和的にすべてがうまく行くと思うなよ。マスターに関しては、松園組がしんどくなつてシッポ巻いて逃げたつて聞いたぞ！お前の周りはゴミだらけじゃの～。」

近藤^{コンドウ}は話ばかりするのに飽きたのか、挑発するようにゆづくりとジエスチャーレを加えながら言つた。タチバナは「挑発に乗るな」と言つてきたが、俺だつて暴力で解決するつていうのは、最近はどうかと思い始めたけど、自分の大切な人を馬鹿にされて見てみぬふりをするような人間にはなりたくなかった。

「モツサ！タチバナ！わりい、俺と一緒に戦死してくれ！」

俺の言葉に、初めは驚いていたモツサもタチバナも、全てを理解したように深く頷いた。

「早河氏、それがどういう意味なのか知つての発言ですか？500万程度のために命まで捨てるなんて馬鹿げていますよ。」

河嶋^{カワシマ}は俺を宥めるように言つた。

「つるせえつちや。お前、さつきから理屈っぽいんじゃ！」

さつきまで冷静だったタチバナは、珍しく感情を表にして叫んだ。その悪口は、理屈っぽいタチバナが言つてはいけないとは思つが、それに触発されて俺も叫んだ。

「金のためじやねえわ！モツサとマスターの誇りのためじやー！」

その時、「キューイ」とドアノブを回す音が聞こえた。

第1-4話 男つてヤツは…

扉が開いた瞬間、一に場所と事情をメールしておいた事を思い出した。

俺は、一が来てくれたんだと思い振り向くと、そこには一と至る所に包帯を巻いて松葉づえをついた『背の高いおっさん』がいた。

「お前ら、もつれしまでや。」

『背の高いおっさん』は大声で叫んだ。周りの様子を見ると、どうやらここにいる人間は見えているし、聞こえているようだ。タチバナも『背の高いおっさん』が見えていたらしい、確かめるように早く口調でしゃべり出した。

「は? どうこう事? 」、もしかしてオレにも幽霊が見えるよつこなつたんか? 「

一は、「いいや、違う。この人は幽霊じゃない。」と口にする俺たちの方まで近寄つて来た。

「詳しきは、後で説明する。それより、もつれの件は解決したんよ。」

「

「どうこう」と一。」

先に声を荒げたのは総長の近藤だった。自分の知らないところで事が終わっているなんて俺だって腹が立つ。その返事には、松葉づえをついた『背の高いおっさん』が答えた。

「兄貴が組に戻った…。それでこの問題は終わったつたりゅうじや。」

「兄貴とはマスターの事を言つて居るのだろう。『背の高いおっさん』が何でみんなに見えているのかは後で一に聞くとして、問題は解決したとはどういう事なのか聞こうと口を開けた瞬間、近藤が割り込んできた。

「おい、橋場さんよ。解決したとはどういう事じゃー俺たちはそんな連絡、受けちゅうんだー逃げ出したかと思えばそんなホラ吹きに戻ってきたんか！」

確かに、『背の高いおっさん』はコイツらに捕まっていたはず。近藤が「逃げ出した」と言つていたのと、『背の高いおっさん』が目の前に居る事に誰も驚かないところを見ると、橋場さんというおっさんは初めから死んでいない事になる。

「俺は確かに、自分の組を裏切つて金を奪つた。せやけどな、あの金は兄貴が力タギになつてせつせと息子との夢のために稼いだ金や。それを組長は、兄貴を組に戻すために圧力をかけて金を引っ張り続けたんや。やのに、兄貴は文句も言わはず金を納め続けたんや。そんな見て耐えられるわけないやんけつ！」

橋場のおっさんが言い終えると、携帯が鳴り始めた。それに気付いた河嶋が携帯を出して何やらしゃべり出した。

なぜか河嶋がしゃべっている間は誰も怒鳴ったり騒いだりせず、下を向いたり服を叩いたりして変な時間が流れた。携帯で誰かがしゃべっているので静かにしようと思うのも分かるが、こんな緊迫した状態の中でもそんな気遣いはいらないのではないかと少し思った。

河嶋は不満そうに携帯を切ると、近藤の元へ駆け寄り、耳打ちをした。今度は近藤が不満そうな顔を浮かべると、俺たちに少し小さな声でしゃべった。

「確かに、解決したみたいやの。あ～あ、全然おもんない。」

そう言つと、近藤は「帰るぞ」と言ひ放ち、仲間を連れて倉庫の出口に向かい始めた。

腹の虫が治まらないのか俺たちの横を通る時に、1人づつ舌打ちをしながら出て行つた。

俺は、何が何だか分からずにしばらくその光景を見ていた。タチバナは即座にモッサの元に駆け寄り、縄をほどいた。

そして、俺たちは倉庫の出口まで行き、地べたに腰かけた。橋場のハシバおっさんがブロックの上に座ると、タチバナが俺たちを代表して質問した。

「んで、一。ハジメこの橋場さん？やつたかいな。この人が何でオーレ達にも見えて、そんで嵐の様にこの事件が解決したんか聞かせてもらおうか？」

「は、「ん~、何からしゃべってええんかわからん……」と言いながら

困つた顔をした。すると、橋場のハシバおっさんがしゃべり出した。

「まあ早い話、俺は死んでない。死にかけとつたのは確かやけどな。

「

「まあ、見るからに死んではなさうやね。見間違いかもね。あ、それとみんな助けてくれてありがとう。」

さつきまで、一言もしゃべらなかつたモッサが急に口を開いた。俺たちは「まずお礼が先やろうつ」と全員で一斉にツツコんだ。少し場が和んだのを見計らつて、一^{ハジメ}がゆつくり口を開いた。

「ここにある『背の高いおっさん』こと橋場さんが松園組内であつた抗争の主犯格つてことも、何で組を裏切つたのかはみんなも分かつたよね。」

俺たちが「うん。」と返事をするのを確認すると、一^{ハジメ}は続けた。

「トップブラザーが山口に逃げてきた橋場さんを拉致つて袋叩きにした後、マスターがこいつそり助けてくれたみたい。」

「そ、そんで肝心のマスターはどう行つたん? さつき、橋場さんが『組に戻つた』って言つたけど、どう言つことなん?」

俺は待ち切れずに口を挟んでしまつた。

「どう言つ事つて言われても、そのまんまの意味や。陣君達と俺に今後、手を出さないと言つ条件で兄貴は組に帰つた。兄貴は組長の息子で、行く行くは組を継いでいく人や…。ほんま、俺はいつもあの人に助けられてばつかりや…。」

橋場さんは悔しさを押し殺すように右手で握りこぶしを作り、続けた。

（ハシバ）

橋場さんは悔しさを押し殺すように右手で握りこぶしを作り、続

「陣君…。すまん、許してくれ。俺が余計な事せえへんかつたらこ
んな事には…。」

「俺に謝られても困る。まあ、大阪に行けば会えるんやう?」

俺は、辛氣臭くしゃべる橋場さんに明るく返した。

「いいや、君らとは住む世界が違うんや。今までみたいには会われ
へんやろ。陣君…、男ってもんは不器用にしか生きられへんのやろ
うな。愛する人の子供の為にカタギになつて、どんなに死に物狂い
で働いても、自分の父親がヤクザと知ればその子供の人生を狂わせ
てしまうと思ったんやうな。その子が物心つく頃には他人のフリ
をして暮らしたんや。子供を一番近く見守れる場所で…」

橋場さんの目が俺に何かを訴えるように見えた。俺は、なぜかそ
の訴えの意味を感じ取っていた。

「嘘じやー!マスターが俺の父親なんて!」

俺は、気づけば橋場さんの胸倉を掴んで叫んでいた。橋場さんは
冷静に「ホンマや」と呟いた。俺は、沢山の急な出来事に何も考え
られなくなつた。橋場さんは優しく俺の手を放つと遠い目をして呟
いた。

「…兄貴はただ、普通に人を愛して、その人との子供を普通の父親
として生きたかったんやな。俺たちの世界じゃ、そんなもん許され
るわけあらへん。ヤクザもんはヤクザもんとでしか生きられへんつ
ちゅう事や。」

今まで父親代わりだと思っていたマスターは実の父親だった。この事は怜は当然ながら知っていたのだろう。俺は、今まで秘密にされていた事よりも、自分が父親だと言う事を実の息子に言えない親心の方が気になってしまふがなかつた。

いくら将来的にマスターが俺の親である事に負い目を感じても、それでも真実を話してほしかつた。

一度でいいから父親として接してほしかつた：

第15話 Shuwachō!

「え？ 幽体離脱？」

モツサの馬鹿でかい声は店じゅうに響きわたった。

モツサの拉致事件から数日が過ぎ、署でも[冗談]ですまなくなつてき
た今日。

一^{ハジメ}が急に俺たちをマスター^{ズカフ}に呼び出した。なぜか今は、マ
スターに変わつて『背の高いおっさん』^{ハシバ}こと橋場さんがお店を切り
盛りしている。

一^{ハジメ}の説明に首を傾げるモツサと俺に対し、タチバナは「猿でもわ
かるようにオーレが説明しちゃる」と皮肉を交えながら言つものだ
から、俺は少し太太しい顔でタチバナの話を聞いた。

「つまり、『背の高いおっさん』はトップブラザーに袋叩きに合つ
た後、命からがら大金の入つたアタッシュケースを持ち出したつて
事。そこで、岩鼻駅近くの草むらにアタッシュケースをとりあえず
隠し、身を隠そうとするが力尽きて倒れてしまつ。そのまま意識不
明のまま病院に運ばれたんけど、魂だけが体を抜け出して岩鼻駅
に行つた。一とお前は、その『背の高いおっさん』を見つけたつて
事。」

「なんでもええけど、その『背の高いおっさん』つちゅつのはやめ
てくれへんかな~。」

せつかくタチバナが気持ちよく話していたのにも関わらず、橋場^{ハシバ}
さんは割りこんできた。

「…すいません。ところで橋場さんは、自分の魂が抜けて出た時の記憶つてあるんですか？」

タチバナは、叱られついでに質問した。橋場さんは突然の質問に、少し動搖しながら斜め上を見て、記憶を辿る様にしゃべる。

「ん~、そうやなあ。ベットに寝とる自分を天井から見下ろした事ははつきり覚えてんねん。そんで、陣君達を草むらの中から見付けた事も覚えてんねんけど、所々の記憶しかないねん。」

橋場さん^{ハシバ}がしゃべり終えるのを見届けた後、タチバナは何度も頷きながら続けた。

「今の橋場さんの証言ではつきりしたな。一^{ハジメ}は靈を見たんじゃなくて、生靈を見たって事。ん~、認めたくはないけど、幽靈が見えるって言われるよりは信憑性がある。それに、一^{ハジメ}の歌声と生靈は関係していないって事か。」

最後のタチバナの言葉が理解できなかつた俺は、「歌声と生靈は関係していないってどうこいつ事なん?」と間髪を入れずに質問した。

「お、良い質問だ。」

なんだかタチバナが生意気に見えた。そんな事はお構いなしにタチバナは淡々と話を続けた。

「巷で一^{ハジメ}の能力は、歌を唄う事で発揮されるとされちゅうやろ?今回一件はその歌を唄つていないやん。オーレの見解は、生靈などは歌声がなくても見れるつちゅう事やないやろ?つか?」

「タチバナちゃん、幽霊とか信じてない割には深読みするんやね~。」

「

モツサは、胸にグサリと刺さるようなジックノミを入れた。

「「ひむせえー信じてねえ事には変わりねえっちゃーまあ、とにかくオレが何が言いたいんかと言つと…」

タチバナは、もつたたいぶる様に氷水を飲み干して、俺の方を向きながらゆっくりしゃべる。

「美空（ハムカ）って言つたっけ？今考えれば、お前はあの子も一の歌声とは関係ない所で出会つちよつ…。もしかしたら…」

「タチバナつーもう止めようやーせつかく陣（ジン）も忘れかけちよのこ…」

「…」

とつさに一（ハジメ）がタチバナを止めた。タチバナもふと我に返り「あ、ごめん。」と言いながら、ずれた黒ぶち眼鏡の位置を元に戻した。そして、あたかも重くなつた空気を払拭するよつにタチバナの口が動く。

「とこりでしょ、例の大金つてどつなつたん？」

「あれさ、怜（レイ）が半分はボランティア団体寄付して、もう半分は老後の貯えにするつて言いよた…。なんか、期待持たしてごめんな。」

あまりにも俺の返しが真面目（シキムツ）だったのでタチバナは何も返す言葉が見つからなかつた。

「タチバナには珍しく今日は田、裏目に出るね。」と励ますように

囁く一の言葉はどちらも聞いていない様だった。

もし、さつきタチバナの言っていた事が本当なら、美空はこの世界のどこかで生きているかもしない。俺は、そんな小さな希望が生まれた事だけで少し嬉しくなった。

そして、みんなそれぞれ用事があるとかでマスターズカフェを出て行った。店の中には、橋場さんと俺だけになつた。

「ははっ。何やあいつら、氣を使って陣君を一人にしてやろうと思つたんやううな。」

この人こそ、俺に気を使つて愛想笑いなんかしながらしゃべつている。

一時して、橋場さんは意を決したように俺に話しかけてきた。

「突然やねんけどな、陣君に見てもらいたいもんがあんねん。今朝、この店を掃除しどつたらな、こんなもん見つけてん。」

そう言つと、カウンターの下から古めかしいノートを取り出し、俺の目の前に置いた。よく見るとノートには汚い字で『ダイアリー』と書かれてあつた。俺は、せつそくそのノートを読み始めた。

『1984年8月29日、晴れ。クソ暑い夏。夕日が落ちる頃に俺は息子を授かった。陣と名付けることは前から決めていた。ずいぶん、世間から褒められるような事をしていない俺でも、この子の目を見るだけで頬が緩む。この子の笑顔を見るためなら何にでもなる気がしてきた。

1987年4月20日、曇り。今日は親子水入らずで映画を観に行つた。陣は幼いなりに「イノセントマン」というヒーローに憧れたのだろう。帰りに買ってやつた「イノセントマン」のぬいぐるみを肌身離さず持つている。

1987年8月29日、晴れ。俺は苦渋の決断を迫られた。極道の道を誇りに思つていてる俺が父親だと陣の明るい未来に影響してしまう。この子には自由な人生を選ぶ権利がある。だから、父親をやめる事にした。せめて、陣が18くらいになるまでそばで見守つたい。

2000年4月15日、晴れ。陣が学校で大喧嘩をして見事に負けて帰つて来た。父親として何かしてあげればいいのだが…。』

そこには、正直なマスターの気持ちが綴られていた。

そして、3歳の頃からイノセントマンというヒーローに憧れていた事に少し驚いた。でも今思えば、イノセントマンにただ憧れていたのではなく、幼いながらもヒーローに父親を重ねていたのかもしない。

そして、日記の最後のページにも何か書かれていた。

『陣、喧嘩はタイミングならいぐらでもしろ。本気で殴りあつて初めて相手の痛みがわかるからだ。ただ、自分より力の弱い者や、大切な人には心から優しくしろ。

これから先、出会いもあれば別れもある。大切な人をなくして改めてその人と日々を愛しく想える。

人生に疲れる事や、心から人を憎む事もあるだろう。でも人を嫌いにほどお前は人に出会つていないし、まだ歩き疲れるほど生きてない。

まっすぐ生きる。お前は俺の誇りだ。お前の未来は無限に広がつて

第1-6話 魔女とオヤビン

いつの間にか木々は紅色に染まり、北風が背筋から寒さを伝える季節になつた。

本校も冬服に変わる時期で、この1週間は準備期間としてどうぞ着てもいい事になつていた。

こうこう時は、目立ちたいのかよくわからないが、学ランの下に半袖のシャツを着て来るお調子者がいる。

「もその1人だ。
ハジメ

彼の言い分には「朝は寒いし、昼は暑いやん。」らしいが、確かに利ある気がする。

そんなんくだらないやり取りを一としながら帰つていると、懐かしい人と出会つた。

「オヤビンじやあ。」「
ハジメ

先に気づいたのは一だった。オヤビンは顔を蛭子さまの様にくしやつとして笑つた。

俺が高校に入る前くらいまで、オヤビンは俺の住む市営住宅の隣の平屋に住んでいた。手先が器用で、昔から俺と一を家に招いては手品やギターを弾いてくれた。

歳はふたまわりくらい離れているが、とっても優しくて俺たちが生まれて初めて憧れを抱いた人物だった。ギターを始めるきっかけ

になったのもこの人の影響だ。

俺たちが小学6年くらいにオヤビンは町田のばあちゃんと一緒に住んでいた。ばあちゃんと呼んでいたが、オヤビンの母親だ。

町田のばあちゃんは、近所の人達から『町田の魔女』と呼ばれていた。

名前の由来は、毎日のように近くの山へ行つては山に生えているキノコや雑草などを籠一杯に持ち帰つて来るところから皮肉を込めてそう呼んでいた。

町田のばあちゃんは、週に三回くらいはウチに来ては、大好きなお酒を飲んで歌つていた。

「アーリラン、アーリラン」といつも同じ歌を口ずさんでは、帰り際になると涙を流すのが恒例だった。

「お国に帰りたいのぉ……。でも、息子は□□（日本）が故郷やけ帰るに帰れんわい。」

そう、彼女は朝鮮人だった。

戦後の高度成長期に國から無理やり連れてこられ、日本のために働いた。今の日本を作り上げたのは言わばこの人たちのお陰だと言つても過言ではない。

だが、世間は日本人じゃないと言つだけで下に見てしまい、嫌がらせもいろいろ受けたと申つ。でも、怜は「どこで生まれてようが、どこで生きようが、馬が命えばみんな友達や。」と呑気な事を言つて誰とでも付き合える。

そんな誇らしい母親に育ててもらつたお陰で、偏見と云ふ名のフイルターを着けずに本質を見通せる眼を持つことが出来た事を感謝している。

町田のばあちゃんは道端で会つと決まって同じ事を聞いてくる。

「陣^{ジン}や、ばあちゃんの事、好きか？」

俺は迷わず「うん」と返す。すると、ばあちゃんは、がま口の財布から五百円を取り出してくしゃっと微笑みながら俺の掌にソレを置く。そして「ジュースでも買っておいで。」と囁くと、笑顔のままその場を立ち去る。

今考えると、俺たちから嫌われるのが心のどこかで怖くて、口に出して愛を確かめたかったんだろう。俺は、そんなことしなくとも、ばあちゃんもオヤビンも大好きだった。

でも、何もわかつていなかつた当時の俺は、「好きか」聞かれて「うん」としか言えてなかつたんだ。

ある日の夕方、ばあちゃん家で遊んでいる時に昔の話を聞かせてくれた。

「ばあちゃんね、たけしの夢を奪つたんよ。」

たけしとはオヤビンの事で、ばあちゃんは大粒の涙を浮かべてしやべりだした。

「あの子はね、真面目でぶち元気な子供やつたんよ。小学生の頃か

らかね、皆勲賞を取るのが夢でね。どんなに熱だした日でも倒れそうになりながら学校に行つたんよ。」

オヤビンの昔の話を聞くのは初めてだったので、プラモテルそつちのけで聞き入つていた。

「あれは、忘れもせんね、小学6年の時に、遠足があつたんよ……。でもね、ばあちゃんの家にはお金がなくてね……。握り飯も作れんでね……だけしは生まれて初めて学校を休んだんよ……。」

当時の俺には、ばあちゃんにかける言葉なんて見つかるわけもなく、泣きじやぐる彼女を見つめる事しか出来なかつた。

そして、中学2年生になつたくらいから、俺と一^{ハジメ}は新しく出来た友達と遊んだり、はじめたてのギターの練習だなんだで町田のばあちゃんの家には行かなくなつていた。

風の噂で、ばあちゃんが入院したことだけは知つていたが、お見舞いにも行かなかつた。

そして、ある夏の暑い日。棺桶がばあちゃんの家に運ばれて行くのを見た。

急いでばあちゃん家に行くと、オヤビンの啜り泣く声が聞こえた。棺桶の中を見ると、白髪の老婆が静かに目を閉じたまま眠つていた。

俺はこの時、生まれて初めて人の『死』と直面した。

夏にも関わらずひんやりと冷たい室内は今まで遊びに来ていたばあちゃんの家とはまるで違つた。あまりにも突然の出来事に、俺の頭

の中は真っ白になつていて何一つ喋ることも、悲しい表情を作るこ
とも出来なかつた事をよく覚えている。

俺たちはオヤビンとの再会を懐かしみながら、駅前にある
センテツのベンチに腰掛けた。

オヤビンはデパートや遊園地などで手品などをしながら生計を立て
ていると言っていた。自分の好きなことを仕事に出来るなんて素敵
な事だと思った。

ふとした事から「何か唄つてえや。」とオヤビンからリクエスト
が入つた。俺たちは、師匠の前で唄うとかと思つと何だか照れ臭くなつた。

「アカペラなら『心の花火』がええね。」

と、隣の肌ツルツル男は自分のオリジナルを候補に上げるほどや
る気満々だった。

俺たちはアカペラではあるが、オヤビンの前で唄を歌つた。
この曲はアップテンポなので「アカペラでうまくいくか?」と初め
は思つたが、案外シッククリきた。

一番を歌い終える頃に、オヤビンとは別の視線を感じた。姿を見な
くてもそれが町田のばあちゃんだとわかつた。

ばあちゃんは目を閉じて、俺たちの唄を聞き入るように静かに佇んでいた。

歌い終えると、オヤビンとばあちゃんは大きな拍手をしてくれた。

「ええわあや。早く、トドコーセえや。せせせ。」

「もばあちやんの姿に氣が付いた様だつた。

「はあけやさ。」

ハジメ
一の一言で、オヤビンの拍手がピタリと止まつた。オヤビンは一
の能力に初めて氣づいた人で、一番の理解者でもある。だから、今
の一言でばあちやんがそばに居ることを悟つてしまつたのだらう。

突然、ダムが決壊した様に大粒の涙がオヤビンの頬を流れて流れ
た。

「お袋……。親不孝ものですまんかつたな……。」

オヤビンは、見えないばあちやんに向けてボソッと一言だけ告げ
た。
ばあちやんは穏やかな眼差しでオヤビンを見つめ、ゆっくりと2回、
横に首を振った。そして、触れる事の出来ない我が子を何度も抱き
しめみつとした。

じぱりくして、ばあちやんは俺の方に近づくと、あの頃と回り口
調でに俺に聞いてきた。

「陣や、ばあちやんの事、好きか?」

俺は迷わず、「うふ……、ブチ好き」と返した。

その言葉は、あの時言えなかつた「あつがとう」や「愛してね」や
「ひいて愛」や

「 セーナ 」 でもあつた。

ばあちゃんはシワだらけの顔をくしゃっとして蝶子の様に微笑んだ。

そして、そのままゆうくじと見えなくなりた。

第1-6話 魔女とオヤジン（後編）

忙しい中、読んで頂いてありがとうございました。

「いやな時に…」と思いましたが、何もせずにいられず、心を込めて綴りました。

この作品が少しでも読んで頂いた方の心に残れば幸いです。

いよいよ最終章です。

お時間がある方はお付き合ってください。

なお、この作品は予告なく変更、追加する事がありますので、「了承ください」。

for Taichi Matsubara

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5383o/>

シュワッчи！ Shuwacchi！ -

2011年9月8日03時15分発行